守貞漫稿

巻二十二

別圖

13
18/30
41

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41

ガラス使用

守貞謾稿巻之二十二

喜田川季荘尾張 著 守貞 誌

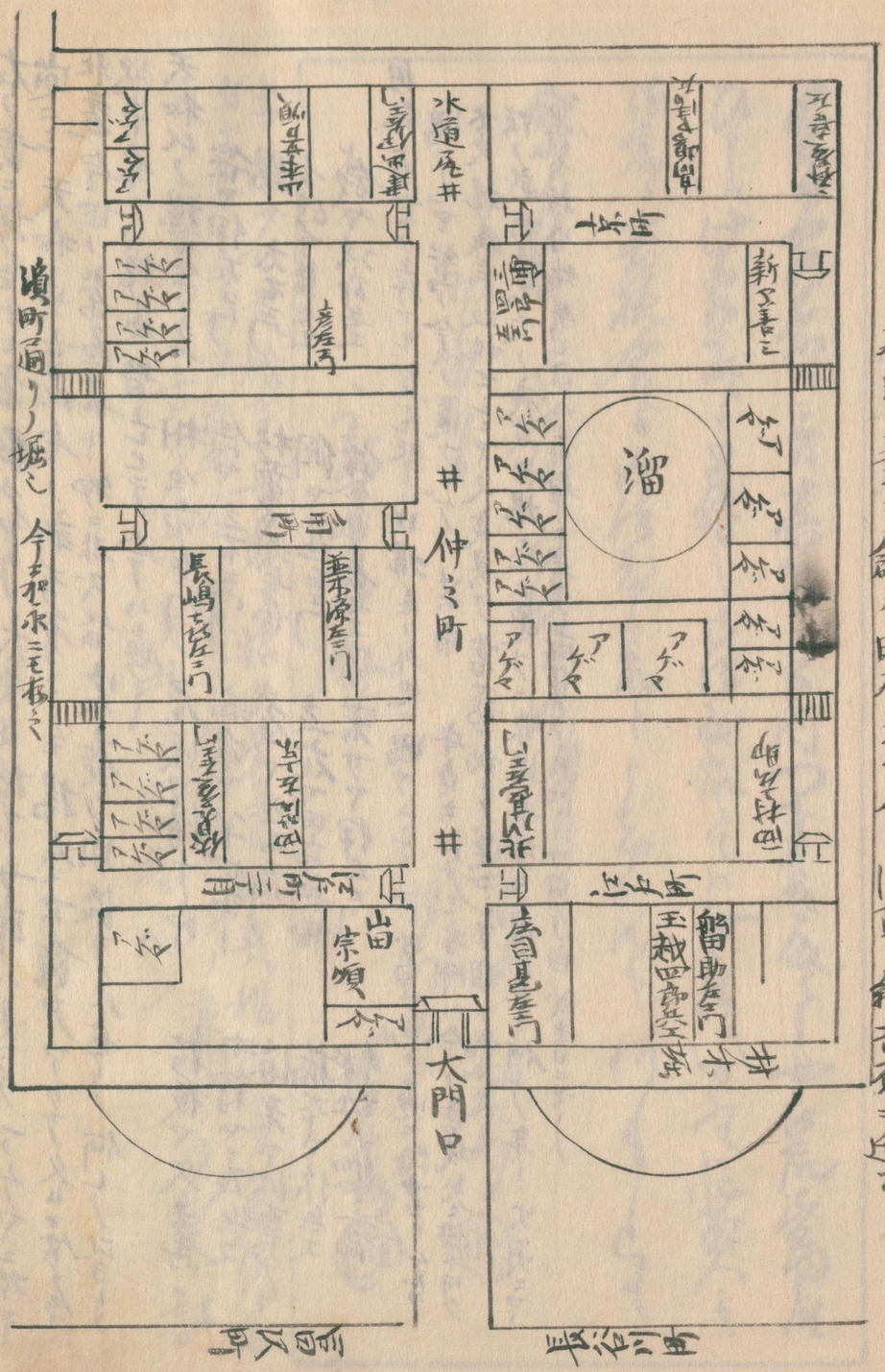
江戸往昔ハ広大ノ地無之諸所ニ散在セリ 城西菊町ニ十五戸
鎌倉川岸ニ十四五戸 大橋内柳町ニ二十餘戸 茸大橋トモハ
今ハ帝都橋ト 柳町ハ今モ通三川岸ニ遊女屋ヲ置シ 此柳町ノ遊女屋ヲ慶長
中元和ノ頃顧寺ニ移ス 此地ヲ遊女屋ト呼ヒ 下宿小路柳原ノ者多リ 鎌倉
川岸ノ者ハ駿府ノ弥勒町及ビ城州伏見夫町ノ者多リ
又今ノ神田佐柄木町 雉子町ノ横キニ堀毋後ヲ掘ヲスリ又髪ヲ
各々美女ヲ抱ヘテ洛柄ノ堀ヲスリ又髪ヲ掘ヲスリ名トシテ其実賣色
ヲ專トス 四州ノ卑前ヲ中略ニテ世人ヲ言ニテ此ノ毋前トモ 此毋前ノ人数百ヲ
別ニ記スベシ 擬其他坊ニモ 此ノ如ク洛ヲスリ
千時小田原北条家滅亡ノ後ニ改テ直轄ノ門トス者 慶長十
七年 諸所散在ノ遊女ヲ一所ニ置シテ 吉原ト称ス 官ニ三事ヲ以テス
其畧曰買色ニ恥ルノ徒ハ農ヲ業トス 農中未嫁ノ女ヲ盗ミ
教ヒヲ費セル帰ヲ催ス 十年ニヨリ土民ニ至ル者アリ 今所謂
一日夜ヲ限リ更ニ不可淹留也 其二曰他人ノ妻ヲ盗ミ 是ヲ娼家ニ賣リ
娼家ハ勾引ヲ案ヲ不ルベシ 其三曰娼家ニ賣ル実父或ハ養父ノ貪慾ヨリ私ニ
養ヒヲ娼家ニ賣ル実父或ハ養父ノ貪慾ヨリ私ニ 死亡或ハ遠国ニ逐ニ是ヲ訴ヘヲ得ズ
今所謂ハ来由ヲ憶ルニテ 此後ニ娼ヲ養ヒ其ハ三日一所不住ノ出

遠ハ毋ヲ竊ス乞丐ノ娼家ヨリヨキハナシ今許可願ハ激客ノ来由ヲ糺シテ山賣ノ麁ハ須リ銅中ノ魚ヲ採ル二比セシメ元和二年官ヨリ赤土事ヲ以テ聽ス其暑日傾城町ヲ他坊ヨリ迎フ者アリト雖モ郭外ニ娼一百夜ヲ限リ長多淹留其三日娼無用流銭ノ肢ヲ用フベキ中其四日妓院ノ経営勿壮麗ヲ擇バス出所不當ノ輩ハ速ニ廳准ヘテ仍官役ヲ免ス其五日士民ヲ撰ミ告訐スベシ右乃チ城東ノ地ヲ二町ヲ給フ此地素北設ヲ外ニテ一郭ヲ劃ス故ニ号テ吉原トス故吉和訓近ク故ニ賀テ吉宝ヲ用リ元吉原ハ今ノ難波町高砂町住吉町等ノ往時廓門ノ街ヲ今モ大門通ト号スソレ物詰曰此町繁昌スル故葺ノ仮屋ヲ破リ西ヨリ東ヨリ北ヨリ南ヘ町割ヲナス先本町ト号シ京町江戸町堺町丈町ヲ並ベ板葺ニ造リ竝町畳町新町ナド号ケ家居美ヲツクリ揚屋町ト号シ幾重モ和ラゲ其周リニ揚屋ヲ割リ能歌舞妓ノ藝ヲ盡ス毎日藝楽ヲナシテ是ヲ見セケル其外勧進舞猿舞操舞ヲ舞ヒ小ツヽミ鼓ヲ専ニスル歌舞伎ノ始ナリ

武江年表ニ慶長年中此比傾城ヲ定リタル廓ハナシ寛永十四年ニ始テ葭町ヨリ来ル鎌倉川岸ニ在リ京六条ヨリ来ル銀杏町ト号ス大橋ノ内柳早ニ二丁餘所ニ慶長十年ニ元吉原ト願寺前ヘ引移ス大橋ハ今ノ常盤橋ニテ柳町ハ今ノ道三川岸ノ一ツ橋ノ南ノ方ナリ醒世紀事ニ云ク前ノ説ニ差ヒ後ニ是ヲ普通ノ説ナレド事跡合考ノ今ノ京橋是ナリ足町ノ東葺沿ノ汐入ヲ築キ立テ傾城町トス其地取左ノ如シ一丁目ヨリ二丁目ニ至ル南ノ片側ヲ角町北ノ片側ヲ仲ノ町トス此説ニヨレハ仲ノ町ハ今伊勢町ニヤ角町ハ今ノ堺町ニヤ傾城町ハ京橋ノ柳ドチラヘナヒコミ近ノ小河ハ今ノ汐留川ナリ二本柳ハ又岡文ノ傍ナリ此時世ハ昇平ニ人口繁多ニシテ湯女ハヤリ出ス此ヲ以テ湯女ノ禁ヲ請ニ庶テ許ス

明暦二年迄廓ノ地葺寺背ト本所ト開ヲ請ニ庶テ許ス トシカチ地葺ニ移サンコトヲ請フテ聽ス後未廓地方二町ナルヲ此時地ヲ増テ二町ニ二町ヲ倍ス又金一万五百両ヲ賜ヒ以テ屋舗ヲ繕ス

日ニ三年六月新廓成テ移居ス是ヲ新吉原町ト号シ今ニ至リ焉ヘ



元吉原町ヽ面　慶長十七年　公司氏前ノ王条孔ヨリ官ニ請ニ之和ヽ年家
居成ヲ葺ヲ創メ明暦二年今ノ地草新吉原ニ近ヲ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

右ノ画ニ揚屋トさ有数々アリ太夫揚子女郎ハ未ニラズアゲヤニ招キ遊ニシ天和貞享比今ノ新吉原ニテモ揚屋ト名ケ揚屋ノ如キ物ニ非ズ皆家ニテ客ノ川流ヲ尽セリ何レノ望リ北廓今世ノ茶屋ノ如キ物ニテ今ハ無シ皆家ニテ客ノ川流ヲ尽セリ何レノ望リ吉原ニハ揚屋皆七ヒテノ今ハ無シ皆家ニテ客ノ川流ヲ尽セリ何レノ望リ天和比ノ揚屋ノ名

笹や伊左エ門　　相模や市左エ門　　尾張や清十郎
揚や太左エ門　　傾や三右エ門　　和泉や半四郎
長崎や清左エ門　　桐や甚右エ門　　角や左右エ門
銭や次郎兵エ　　若狭や伊左エ門　　六花や四郎兵衛
鎌倉や長左エ　　伊勢や惣三郎

旧記貞享ノ序アル庭訓往来ニ曰揚屋ノ外辺ニ鴨ヲムシリテ菊谷竜ノ通ニ路ナカリケリヲ
鴨ノ毛ヤ鴛ノ舎衣ノ道フサゲ　其角　守貞ナドモ当時ハ今ノ吉原ヲ御ト呼ノ
太夫揚屋ニテ双枕セシヤ又夜具ヲ菖蒲ニ飾ラシヤ明ラカニ
吹ノ新町ニ太夫ノ夜具ヲ揚屋ニ運ブニ緋ニテ何ヒノ年ノ次矢ニヤ
其長持皆焼失ニテハ未ダ何ヒノ年ノ次矢ニヤ
今ニ至リ麻布フロニキヲ用ノ曲弐書ニヨリ

天和二戌年　春書画　堅五寸六分　幅四寸二分　花明園蔵

当時ハ太夫格ノ女郎ノ招ク客アル時其揚屋ヨリ差紙ト名ケケル右ノ手形ヲ遊女屋ニ遣スニ此手紙ト次ノ薄雲ノ舟受ノ証文ト二書ニテニ十八人ニ及ブ相心像スベシ

證文之事

一 雲右衛門方へ雲右衛門方へ
雲右衛門方へ雲右衛門方へ
雲右衛門方へ雲右衛門方へ

一本柳町二丁目表京口五間裏西廻
表口拾弐間裏口拾弐間
右之通売渡申処実正也
入口先格子之内ニ紙障子弐本
下ニ高塀有之候
明暦元年
未九月六日
売人 ㊞
同 ㊞
証人 ㊞
同 ㊞

上ノウキシ

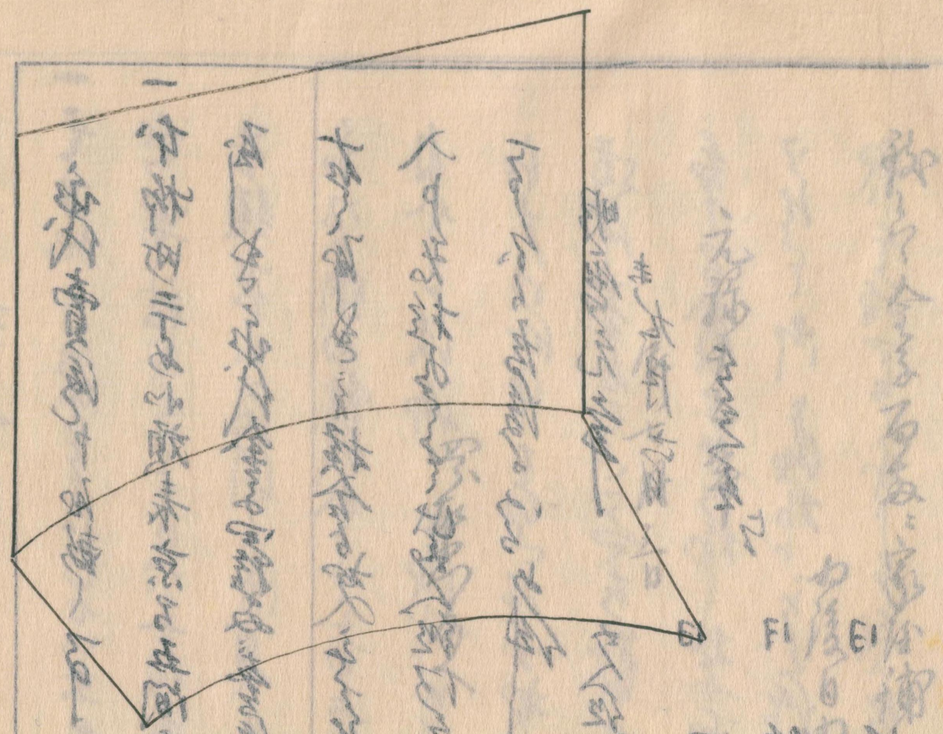
日 ㊞
日 ㊞
書主 ㊞

本柳町ハ私称シ本名ハ江戸町二丁目ニ如此證書ニ公名ヲ記ス私名ヲ以テスルト却テ濫ト不レ知
紙ハ半紙ニ似テ薄キヲ用フ

一 永代賣渡申屋敷之事

元禄十三年
辰ノ七月六日
賣主 ㊞
証人 ㊞
同 ㊞

右ノ通リ



国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

昔時之泥町（今ヶ田町）編笠茶屋之画

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41

ガラス使用

昔新吉原ニ通フノ遊客ハ專ラ庸馬ニノリテ行ノ乃チ馬士小諸節ヲ唄ヒ行ク　專ラ土手ノ弘額山專称院ノ辺ニテ馬ヨリ下リ行ク今世ノ四手駕ハ必ス大門ニ到リ下レ大門オモテト訓スダイモント訓セズ今世人皆知ル所ト雖モ後人ノ為ニ注ス　日本堤　土手トモ　ニ呼次番屋アリ夜行アレハ毎人

枠ヲ打ツ　元禄中ヨリ駕多クナリテ軽尻馬衰ヘ今ハ此馬更ニ一疋モ無シ又昔ハ特乳山下ニ馬ヨリ下リ歩行セル故ニ他見ヲ憚リテ泥町ノ茶屋ニテ編笠ヲ被リテ大門ニ入ルシ又京ヨリ揚タルヲ手編笠トス今ハ田町ノ編笠茶屋名ノミ存ス又編笠ヲ着ル人更ニ少ク又天保前ハ田町ヨリ堤ニ上ルベキ僅ノ此方ニ両辺十ケ所ノ茶屋アリシ故ニ諸所ノ茶屋ヲ田町ニ住ニテ他業ノ家稀シ又右ノ通ノ如キ茅屋ハ何レノ時ヨリ始マリシヤ詳ナラズ　蔦ト云ル草ヲ葺キテ堤ヨリ左ニ折行ク　今モ蔦茶屋ト称ス家号ノ扁額ニ蔦ノ字ヲ書セリ

文久中追書何年ノ頃ヨリ始マリシヤ詳ナラズ　茶屋娼家ヲ兼ネ　土手下ヨリ迫ニ転宅セルモノナルベシ

右ノ庸馬ノ銭ヲ寛文二年ノ刊行小歌集ニ載スル左ニ

日本橋ヨリ大門迄　並ノ駄賃二百文　馬奴（ママ）ニ百四十八文

飯田町ヨリ大門迄　並駄賃二百文　馬奴ニ人

浅草見附ヨリ大門迄　並駄賃八百二十文　馬奴ニ人

白馬駄賃ハ二百四十八文ニ

当時ノ遊客ハ専ラ白ヲ貴ヘリシ白葛ノ下ル所ノ刀　白草袴　白指ノ袖縁　白馬革ヲ以テ為ス

又浅草寺ノ東辺ヨリ田町ニ至ル街ヲ人宿ト云ハ此遺意ナリ

又文化元年刊　高嶋考ニ前ノ駄賃ヲ載テ今日本橋ニテ舟ヲ雇ノ者ヲ附馬ト云ヒ昔ノ遺意ナリ呼ブ舟頭ヲ土手馬ト云ヒ揚銭取ニ往リ日ヲ経テ帰ルヲ附馬ハ今モ有此事テ名モ同ケレトモ今ハ舟ノ下ルヲ専ラトシ土手馬ト云ヒ舟ノ上ルヲ稀トス

廃テ無シ　今ハ山谷堀ニ船宿多シ又寛文二年ノ書馬駄賃ノ条ヒ既ニ寛文元年ノ駄賃ニ倍増ス又天保ノ末ニ又倍ス二年ノ間ニ倍増ス

禁止ノ事ハ此ニ載ル所ノ駄賃ニ乗リ往ケヲ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41　　ガラス使用

古狸屋馬三
廓通セシ時ノ画
今世馬通トモイヒテ
高麗町ヲ北ヘ入ル
古ノ遺言ヲ馬通
トカシ古人草深野
路ヲリシ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41

ガラス使用

今世ハ馬ニ乗リ通ス者更ニ無シ　四ツ手駕ヲ専用シ或ハ宗根船猪牙船ニテ通モアリ　船役ノ外生業船宿ノ条ニ載ス　駕籠賃左ニ誌ス

小傳馬町ニ赤岩ト異名スル　駕籠屋アリ　先今世カゴヤ又ハノ繁昌ナルベシ

此赤岩ヨリ吉原大門口迄　駕籠賃、「并」トテ一挺二夫ニテ昼夜共金二朱　二挺トテ手代リヲ供シテ夫ノ者金二朱又雨天ハ増賃ヲ取ル

此駕籠賃銭モ　洞房語園ニ載ル　日本橋迄二分

京橋ヘ二分　新橋ヘ二分ノ由ニテ　希吉原ヨリノ賃銭ナルベシ

意気張ト云ヒ　ハヤノ述ヲ金銭ニ泥ズ見識ヲ専トスルヲ良夫　古ヘ侠客ノ風ヲ慕ヒ　揚屋ニ遊ブトキハ　言ニ京ノ女郎ニ長崎ノ衣装ヲ着セ　自ラ張ヲ持セ大坂ノ如シ　衣装長サヤ着様ハ大坂美飾ト雖モ　自慢ニ用ヒス　仙台ニ庸ノ高下ヲ見ス建ニ当リ幸ニ風ニテ下ラル時ハ　身受ヲ望ミ金ニ飽ニテ下ラル時ハ　其儘ニ捨テ去ル　是ヲ意気ト云ヒ　世人ノ称美スル所ナリ　大ニ非ス　深川ノ娼妓意気ヲ以テ　天保前ハ深川ノ娼妓意気ヲ以テ　今ハ江戸ニ張ル遊女悉ク　娼妓意気ヲ以テ　著多シ　娼妓ハ京坂ニテ美ヒ　江戸ニ劣ル　是モ天保ニ絶テ　今ハ京坂ニ及ハス

方言　○伽羅ト云ヒ方言ニ一方治前後ニ都ヒ事ニ行ヒ　ヒヒノ述ヲ金銭ヲ伽羅ト異名ノ如シ　金銀ヲ容ニ乞フヲ恥ル心アルカ故ニ推テ則チ伽羅ト名トシ　又物ヲ貴テモ伽羅ト云ヒ　又貴スル事ヲ貴ヒ或ハ安価ヲ貴ヒ或ハ容貌ヲ賞ル其他ヲ貴スルニモ伽羅ト云ヒ

今世茶屋ノ下男ヲ　清岩ト云ケレズミト訓ス　此方言何角拠アルベシ　未考ヘ

女郎屋ノ見世番ト婢ハ下男ヲ　ヂギウノイトヽ牛童ヤ

女郎屋ノ主人及ヒ妻ヲ　常ニ住スル処ヲ内証ニテハ不宜シ　客ニ逢ハヌ処ヲ内証ニテハ不宜シ　又大ヘヤ或ハ部屋ト称ス

大見世半籬等　専ラ内ニテ小ヘヤノ引部屋ト称ス　又岡場所ノ駅家等　専ラ部屋ト称ス

高札　大門口ニアリ　元禄七年十月始テ建ル　正徳元年諸所高札書改ノ時是亦改制　天今ニ至リ蓋元禄ノ高札ノ文　其文未詳　元禄高札ノ文曰此外向ヨリ林遊ヌバイク限置候得者早々番所ヘ訴出可申候乍シ隠置ヘキモノシ　戌十月

何者ニヨラズ馬乗物醫寺院之外一切無用タルベシ　附鑓長刀門内ヘ可為停止者也　十一月

正徳元年高札一旦前々ヨリ制禁ノ如ク江戸所々端々ニ至ル迄遊女類隠置ベカラズ若違犯之輩アラバ其所ノ名主五人組迄可為曲事者也　医師ノ輩ノ外何者ニヨラズ乗物一切無用タルベシ　鎗長刀門内ニ竪ノ可為停止者也　五月

△吉原ノ部

○京町一丁目

一吉原　一ツ目ノ門

一吉原　弓尾　ぐるいちょう

一吉原　小柴　こぶろ（こぶとり）

○岩屋七軒ノ門

一吉原　吉野　さんざき　初音　紫

○角町

一吉原　九十九　ツクモ

△吉原格子ノ部　七人

○京町二丁目

一吉原　一ツ松　まつさと

一吉原　一ツ松　小まつ

一吉原　一ツ屋　ひとつや

一吉原　一ツ屋　小ひとつや

一吉原　一ツ屋　一ツ屋

一吉原　一ツ屋　一ツ屋

一吉原　一ツ屋　一ツ屋

此吉原細見書年号ヲ以テ所破損ニテ失スト雖モ大概吉保ノ物ヲ出ス尚ノ吉保十九年ノ物ト凡體異ニシテ後ノ板本ハ自ラ古ルニ此書追ル終ト見エ而モ前本ニウメチヤノ妓品無ク又太夫此年ニハ七十四ケトシ次ノ年永ノ本ニハ九十月トス而シテ近来虚名ト雖モ金一両ヲ以テ即銀ニ三匁七十五分ナレハ其優復古ニ近シ此ノ如キ麦葉追考スベシ

合十一軒

▲吉文字合七人（但し金棒二つ別）
▲吉文字橋本合六人（但し金棒二つ別）
▲吉文字合五百石揚屋（灰屋のだう金ぞめの事）
▲うめ茶合五百石揚（すゑもりて金ぞめ）
▲みす屋合揚九人（初ものうち）（但しこれも金棒）
▲三すぢ屋合揚六人（初ものうち）（但しこれも金棒）

恵文社合弐百六拾七人

右之通年々お改め被成候

八軒 今ハ橋場 今ハ橋場ト云

三軒 今ハ山谷ニ多シ 吉原ニ隣ス

右之細見之後ニ傾城新色三味線ト云 戯作者ノ書ヲ附テ合本トセリ 其事

一 此里昔ハ今ノ葭町ニ在テ二浦ト云 一ニ堺ト号ス 後見世ノ燈籠昌ト云ヨリ 一ニ葭町ヘ移ル ニ楠昔ノ跡ヲ云ヒテ新吉原ト云ケリ 又葭町ト八女郎屋町 惣テ三軒ト云ケレ共 今ハ五軒アリ 此里ヲ三焼野ト云ヒ 又三野ト云ハ民家ヨリ見ル時ハ日本堤ヨリ見ル時ハ八軒ノ揚屋ノ烟ノ一ニ見ユルヲ云ヘリ 又三野ト云ハ民家ニツヾカヌ原ノ事ナリ

一 吉原ハ昔ノ葭原ニ三ノ倉故三野ト云ヒ 又三焼野トモ云ヒヤラン 又三浦ト云ハ浅草ノ女郎ニ江戸ノ阪ヨリモタセ揚屋ハ大坂ノ九間ノ座敷ヲ遊ヒタヒトテ 京ノ又ルヒ女郎ニ吉原ノハリガアラバ夫ヲ京ニ居ナカラ取ヨセテ見ルヤウニ指ヲハスサマゴトニノコヲヘサセノソムハ又セリフニヒトニノ謡ノ一座ナレバドコヤラヒントニノ謡ノ自ラ京大坂ノ女郎ハ遠フニ申略 忍ス人ノ名トテ掛硯 布頭巾 黄ナド 夜ノ伽ニハ待馬 乗物ニワヤ此内ノ遊ヒ如何ナル帰方ヲ有ベキヲ知ラズ 昔ハ侠客ナドモ有シガ近年ヤミテナヲ此夜見世ノ賑ニテ 何国ハアレド日本無双ノ吉原 太夫ハ称ニ脇トテ揚ヤ屋ヨリスヽム事仕舞ニ出ニ及テ 時計ノ狭箱ノ如クニ二人ノ禿ニ三線ヲ二挺ヤタゲサセ 先ニ立テ二三間ニアユマセ其内ハ女下リテ真中ニ道中スルヲ云ニテ知ルベシ 帯胸高ニシテ腰ヲスヘス足取静カニ仕ヲ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

アリ寺カケテ
ヨフヌトカテ
追カケニ様ヨ
ヤケハ我達
女郎ノ恋男メ
又今宵モ自由
ナル床入懐サモ
懐ト胸ノ陰
陳情充足
ニ早羽打込
迷サニ落ニシテ
ニガ流石ハ江戸
ノ人其侭捨ラ
取ラ帰ル人ハナ
カリシ恐ブ
人ノ名トテ
トツバリシ

取ラ歩メバ遣手ハ小紋ノトラヲ総面ノ赤前垂太夫ノ跡ニ有ニゾ付ル通中ニブラ〳〵トイデタルモナカニ叔宿迄リノニ十七レバ有名ナ六尺ヲ前ハ走ラモ太夫セヌカリトバットシタルト見赤ム館所ニナキトシサニ茶ヲ飲ト同人ニハ角町新町江戸ナド両側ノ大格子ニ何レ劣ラヌ朱塗一軒ニ五十人ツヽモ並ヒ大戸歌唄フヲ三線ノ音ヲ聞ツケテ又ハ火燵ヨリ花ヲ詠ルモヤサシク或ハ手遊ビヲ金ヲ一角ニ包メ假令ニルベキナクテモ座ハ差配スル男何事モ呑込テ二階ヘ上ゲヌサキニ人ヲ子請取テ善悪ノ時味迄ヲルアヒダルコソカシ此所ノ流布詞トヲ床ヘ入ノヲ繪盛ヨトヤ宴ニモ唐ハ一文ヨリ五文迄アリ大坂ニハ一文ヨリ五匁ヨリ塩トカ四匁ニ分ヨリ東トカ二両トカ心ニヤ遊ニハ一寸二寸ニ寸トカ成ベシ先此所有ヨシ揚屋ノ真裏ニ金子二八イチ若者ハ二角遣手若ノ茶屋ヘニ角ヨリ泥町ノ編笠茶屋ヘ一角日貰ナドモ昔大坂ノ八用トハ外ニ三十両ヨリ下ヨシ其上正月節句モ随分親ヤ客ヨリ祝儀遣ヌ是トカニ見事ナ大臣教多有町ノ小間物屋ノ手代ニフラスコトカ男ニ茶女郎ニヤリヲ夫ノ楽トニ下京屋ノ今川トカ女郎ニテ下畧

吉原ヲ三ヤキ野ト異名セラレ今又三ノ輪昔モ吉ヲサニヤトキ今ハ三谷戎ハ山谷ト書テノサニヤトキ又真町マメカラテウト訓セリ今ノ雉焼町高砂町住吉町菖ヲ昔ハ異名ヒテマヤラ町トさしし

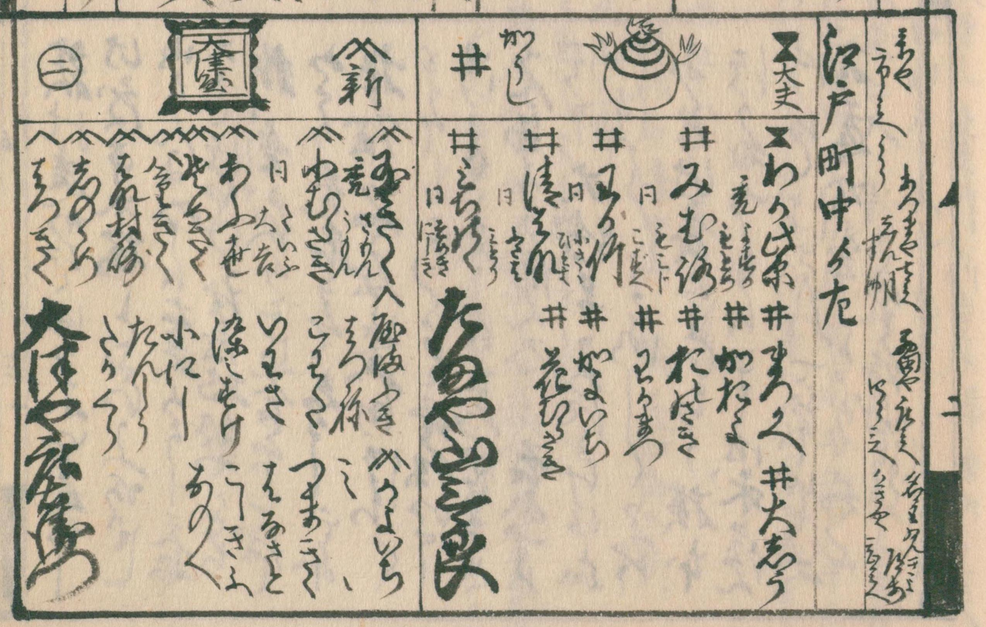
又瓦焼ハ今モ多シ火ノ座ハ今ハ不聞ク八柴ハ橋場後今橋場ニ炭屋ノ女郎ニ江戸ノ張ヲ謡人今モ謂ヘリし

煤竹ノ男花魁ヲ出ス

又従書ニ太夫道中禿ト遣手ト左右ニ先立テ二挺ヲ肩ゲ〻〻〻面アリ文ニハ禿二人トアリ書時事ヲ太夫ニ従ヲ女郎ヲ指ス女郎ヲ二従ル時ヨリノ儀今ノ如リ偏ヲノ列座ニハ何又途中紅着ヲ言ヲヤケズ今モ擡ヘリ京坂ハ無ラズ遣手昔ハ赤前垂セシ故今ハ更ニ不用ク昔ハ京坂今ノ中居ニヒトシキ者ナルベシ

又当時下男ヲ六尺トさしし江戸治両中面ニモ六尺トカリ

享保十九年 吉原細見



国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41

ガラス使用

洞春記園曰 京都江戸遊女ノ名目太夫
始リ藝ノ上ノ名ニシテ慶長ノ比迄遊女ノ
下ニ二ツ三ツ度ヅヽ四条河原ニ出テ居ル者ヲ構ヘ能太夫ト
其時分ハ傾城ノ衆ト名ノ傾城ヲヽヽ云ヒ見物アリ種々ノ餘興華麗ナル
ヲ勤メルナド云ヒヨリ自ラヨキ傾城ヲ
無相違仕衆ヲ招キ町奉行様ヘ傾城
手頭ハ朝晡両度ヽ傾城ヘ上リ居ル太夫一日ノ揚銭二十七匁ト
定メ置ケリ此例ヨリ今ニ
享貞四年前ニ太夫員数七十四人アリ
此内倉敷園ハ古ヨリ保ヒ手ノ舞ノ始皇松ニ太夫ノ舞ヲ授
又右ニテ太夫ノ名目許サレ因テ業ノ
ケリトヨリ太夫ヲ称ノ往トヨリ今ニ
往々有リ
又太夫当時ハ手頭ハ朝廳ニ出テ拝礼スル故何レ時ニ廃シヽヤハ
今ハ此ノ事ヽ今世ニ奉行所ニ出ルハ多クハ為聞ニ
賞ハレタル故ノ其ノ跡ヲ捕テ吟味ノ時聞ト跡ト両言ノ合ヤ否ヤ
ヲ糺スノ具ニヲリ合トスレ此廳ニ出ルニモ
且花麗ヲ旨トシ往還ハ四ツ手駕ニ乗ルシ其ノマヽ廳ニ出ルシ
途手際ニテ下ツヽ言上ハヤリテカ故ニ代ニテ概言上ス

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

日書ニ天神揚銭二十五文ヲ納メシハ天
神ヨリ吉原ニ入ル名目十二
指ス太夫ノ次ニ位ス都ノ天神ニ同シ
上ノ鶏ヨリヒトキハ勿体ヲ付ル局ニ書ヲ録レスヤリニ指スト云名
ヲ付ク
局女郎一日ノ揚銭二十目ヨリ偖ヲ
ヲ揚銭散茶ト同シ人金百足ト云ヘトナル局ノ描ヘヤリハ表ニ長押ヲ
付内ニ六尺ノ床ノ庭アリ局ノ廣サハ奥行二間
半間ト庭ノ奥ニ幅二尺ノ片側ニ長二尺ニ
表鶏指ス上段ト下ノ奥ニ幅一尺五寸許ノ腰掛ヲ付ケ
ヤチ深ノ障子ヲ建ツルハ後ノ名誉ヲ露ヲ厭ヒ右局ノ
指重ヲ記スコトハ無益ナレ共元禄年中ヨリ局ト云ヒ指ヲ拾リ名ニ昼ヲ
吉原ノ古風古実ニ取失ヒシ事多ケレハ後ノ為ニ記シ置ナリ申錆アリト十五束ヲ傳ヘシ
コトリ昔一ノ宮御息所ニカクレ
玉フトテ役地ヘハ往ケ玉ハズ藝州廣島ヘ著セ玉フ此時戦国ノ都ヲ
零落ノ後都ノ官女遠ク下向シ御由ヲ聞
サハヒシリ帰リ上リ玉ハンコトヲ叶ハズ彼官女遠ウキフシノ勤ヲ
トシ伝ヲテ廣島也京上ノ腸ト
云ヒ習ケルヨリ遊女ノコヲ上腸
始ハ二名ヨシ書ハシメケレヨシ彼上腸ノ居ヲ所故局ト云ヒ帳ヲタレシ帳ノ
始ハ二葉ノ露草ノ名ヲ又ヤリテトヲ
苹ヲ付ケル也ハ今ノ局上腸トヲハ彼官女遠ノ跡ヲウケ上腸トヲ

来リシトヨリ語リ傳ヘタリ此事何書ニ何ノ
古ヤ物語リニ傳ヘシ事也
禿 禿ヲ甲ヲス小女ヲ書也ノ名シ
鑓手 又ノ名ヲ香車トヲ傳フ俗ニ
ヲヘハノ香車ガ別ノ名ヲ又ヤリテトヲヘハ
元ニ廻レトヲ心シ也ニクワニヤトヲヘハヒヾヒアヒキトテヤニヤトヲカヘタリ
ヤンヤトヲヨリ赤ヤリテノ名アリ
等貞曰ヤリテヲ昔ハノ香車トヲヒ
名慶セリ 吉原ニハ揚ヤ茶屋ノ事ヲ花車トヲ云ヘリ今ヲ也
姫飯 ケヒトカナヲ名セリ 貞文二年寅ノ秋中ヨリ吉原ニ始メテ
出来ル名シ 往来ノ人ヲ呼声唯スヒリ
テ飯リ見エル迚喧飯ヲ書セタリ呼声喧
ヲ者温飩蕎麦ヤヲ商ヒ一人前ノ丼ヲ
銀目五分ニ売ヲヒ端飯ト云ヘリ其比江戸町二丁目ニ仁左衛門ト
ヨリ世間ニ賑ヘリ 蕎麦ヤヲ仕込テ
等貞曰喧飯ヲ端飯ト云ヘルハ端ノ下直ナル
ヲ云ヒ也 端ハ局ニ上玉ヲ端ハ局ニ
化粧トハカリノ装ニテ小銭遣ヒノ衆生ニ始メテ故シカレハ
又局ト端ト回シ摘飯迚考ヘタリ
ヤリチキリナラハ假契ノ事ニテ
長屋女郎ヲヲ又切見世ヲヲ
又河岸ノ局女郎ハ持銭二十文ヤリシカ散茶ニ押レテ昼モ

一分ニナルヨリ前ノ古銅貝ニ白メ茶合四百四十人ト云ヒ
昌梅世十四日夜八二十四ヨリ各十四ニテ昼夜ニ
トモハウメ茶トハヨキ故五ツハ喧ビニ端又今ノ如見世ヨリハ上品
ナシ訓蒙ノ端ハ者ニ玉フトモハ昔ノケンドン今ノ長屋女郎ノ
類ニテ白メ茶トハ格別ニ

客ノ構ヘハ表ニ長押ヲ付ケ内ニ六人ノ小座アリ客ノ廣サハ奥行二
間弐ハ六尺ニ奥行二間ニシテトヨリ今世吉原ノ客見世ト同制ニテ表四尺裏行六尺
ハ土ニ記ス岡場所ノ長家客見世ト同シ
トモ云ヒ一人ノ有ニ非ス大抵一ニ三人女郎ニ四人アルヨリ四ノ見世トモ稱ニハ
ル者往々有ルニ二ツ見世ノ内一妓ハ專ラ二妓ハ抱ノ女郎ニテ後世スタリ
四ツニモ五ツ見世モ有リ実ニ人ノ小座アリ客ノ廣サハ奥行二
間弐ハ六尺ニ記ス岡場所ノ長家客見世ト同制ニテ表四尺裏行六尺

延享三年細見　前ノ寛保ノ細見ニハ太夫七十四ケ　格子五十二ケ
寛保以後揚銭ヲ貰セシモノ　故ニ後ニハ太夫ヲ繁昌ト
十リニヨリ寛保ヨリ人数減シテモ　延享ニ太夫ヲ
ハ名ノミ
無リシト見ユ

江戸町壱丁目中ノ丁より左ノ
格子　九十目
　　六十目　左ま山之助
寛小むら紀
寛若紀
寛松花
寛いと紀

○細見

安永四年吉原細見

惣在原其外合印　年中月次りん日

太夫　九拾目	正月。松の内七ツ多ク出ル。	二月。	三月。	四月。	五月	六月。	七月。	八月。	九月。	十月。	十一月。
格子　六拾目	土器日五ツ六ツ七ツ	十六日十七日十八日	十七日十八日	十七日十八日	十七日十八日	朔日	朔日	朔日	朔日	朔日	朔日
さゝや分　金三歩	朔日	朔日	朔日	朔日	朔日	十五日	十五日	十五日	十五日	十五日	十五日
在原格　八匁	十五日	十五日	十五日	十五日	十五日	十六日	十六日	十六日	十六日	十六日	十六日
同三拾目　片ちがい	十六日	十六日	十六日	十六日	十六日	十七日	十七日	十七日	十七日	十七日	十七日
同拾五匁　片ちがい	十七日	十七日	十七日	十七日	十七日	十八日	十八日	十八日	十八日	十八日	十八日
同三拾目　弁天町之分	十八日	十八日	十八日	十八日	十八日						
新屋格　八匁											

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

正月遊客得意の者ハ他家へ贈り物ニ行ク事ハ第二月ノ廻礼ニ同ジ

弘化四年丁未ノ新吉原町細見 表題画 五葉の松一色世ノ毎年同題

○揚代金直段附合印平日定

新造附 金壹両弐分	昼夜共 金三分 夜半金壹両弐朱	新造附 昼夜金三分 夜半金壹両弐朱	新造附 昼夜金三分 夜半金壹両弐朱	新造附 金三分	新造附 金三分	新造附 金壹両
新造附 昼夜金三分 夜半金壹両弐朱	見世出居 昼夜金壹両弐分 新造附 夜半金壹分	新造附 昼夜金壹両弐分 夜半金壹分	座敷持印 昼夜金壹両弐分 夜半金壹両弐分	部屋持 昼夜金壹両弐分 夜半金壹分	座敷持印 昼夜金壹分	部屋持 金三分
新造附 金壹分	部屋持印 昼夜金壹分 夜半金壹両弐朱					

表紙ハ裡片葉ニ記セリ

大まち紀文無印 ■印
まつ紀まつ ▲印
勢ま伊紀 ◑印
かぶ三の手代家名の
よふ ちょん 重い

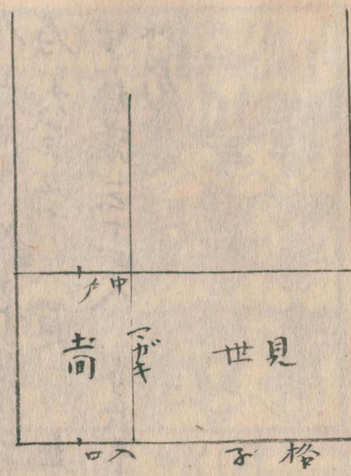
○年中月次の日

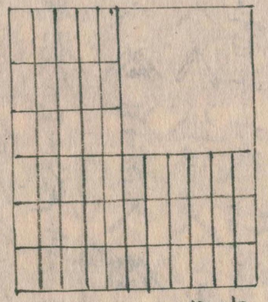
正月 松の内
三月 三日四日
五月 五日六日
七月 七日十日六日
八月 朔日
九月 九日
十月 七日

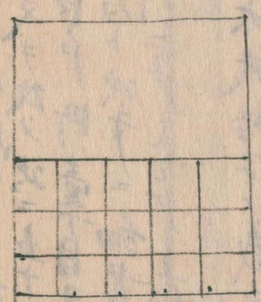
国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41　　ガラス使用

右弘化ノ細見ヲ書写ス今體ヲ改メ序文ヲ略シ直段ノ表紙ノ次ニ記ス其次ニ五十間道ノ序文ヲ改メ次ニ大門ノ図其次ニ仲ノ町茶屋ノ順書ヲ其次ニ引手茶屋ノ名ヲ記ス其次ニ大籬ノ部ヲ書ス中小格子ノ部ヲ書ス其次ニ半籬ノ部ヲ書ス其次ニ惣半籬ノ部ヲ書ス其次ニ惣籬ノ部ヲ書ス其次ニ惣籬ノ部ヲ書ス其次ニ惣

大見世ヲ惣ジテ離レテ今世玉屋ト云ヒ京町ノ二ノ
小見世ヲ中橋ト云ヒ呼出シ女郎一人ヲ魯ヲ以テ
仲ノ町張リ呼出シ女郎二人ヲ
魯ヲ以テ一分女郎ト云ヒ者ノ
抱ヘ置クルヲ大町小見世ト云
ダイテウマニセト訓ノ
又二分女郎ヲ切リ或ハアリテモ
唯一人ハヤリニテ二朱女郎
ガチナルヲ小見世ト云
又百文夜四百文ノ
銭見世ヲ小格子ト云







紋日　羽序語圓曰　紋日小袖ノ紋ハ五所ナレバ五節句ヲ小袖ノ紋ニ唯
ヘニ節句　祝ノ日ヲ　紋日トモヨシ士官ニ有ニテハモニヒヲ警ニノ紋日ト
云モニ日ハ上ノ詞ニシテ

守貞曰　予カ所蔵ノ季寄ヲ考ルニ紋日ノ名ハ多クハモン日ヲ異ニシテモノ
云キハ不審シ多キ季寄ヲ近日ニ及ク
無日ニテモニヒモノ日トカヲアリ
日ニシテナルベシ
上坂ニハ必ズモニ日トカヲズモノ日トカヲズ
他ニモ物ノ本ニハ事ヲ紋日ト書リ
上方保ヲモ多ク細見ニモ紋日ヲ歳中月次ヲ
七リ而モ吉リ時々紋日不同又
又上坂ニ古今不同又上京モ大坂モ其所ニヨリ紋日大ニ
小異アリ

日書ニ曰　揚屋ニハ九ノ日トカヲ正月八七日ヨリ二月ニ十日迄其外十四日十五日二十日
ト定メ正月ニ十日アリ　此九ノ外ニ一ヶ月ニ一ツ加ヘ十日ノ内ニ
一階ノ業用ニ高ニ客人ヨリ申受ル礼銀七
匁ナレハ其一階十四匁ノ積リ一ヶ月十日ノ礼銀ヲ
ナシ礼ニ言葉アリテニ両ニテ申故ニ九ノ
九ノ日ト名ケシ俱ニ吉祥ハ正月ニ限レリ
日ハ大方九日ナリ
守貞曰　九日トカヲ今両ノ字ヲ略シ又詰圓ハ上京保五年ノ書ニ
日十七年ノ細見ニ紋日正月ハ六節句ノ内十一日十四日十五日十六日

十七日十八日廿日二十八日合テ十五日アリ安永ト申ス

花聟ナイラント訓ス盡正字ニ非ンし此言ノ起リハ新造夜ビ未ダ
已ヲ仕ル所ノ太夫ヲ指テオラガ太夫ヲトカオラガくトカオラガハオノレラガ略詰し
オヒラケくトカヨリ今ハ太夫ノ称ハ七ビテ吉原ノ上妓ヲオヒラケト
通称スルし

新造禿等ノ供ニテ伸ノ町ノ茶ヤニ出テ待ツテ客ヲ待ズ申ノ刻ヒヨリ格ヲコラシテ
妓品ニ至ル者ヲオヒラケト称又十七八ヲ又嵩モ其他ノ人モ吉原ノ遊妓ヲ指ノ
凡妓ヲモサシテヲヒラケト云ハ誤ベハ大門ニ至ラヌル小角カヲモ面會ノ
時称スベシ同取トカ主ニ非し凡妓ヲ指ヲオヒラケトカト云時オヒラケ者ヨリハ且那ト称スルヤ如し同ニカ
方言畑唐し呼堂ニ怨者ヲ女郎ト
前ノ安永ノ細見ヲ見レハ今世ノ呼ビ名ト何ノ比リノ古ヲ知メケルカ安永ニハオヒラケトカ
ノ名目アルベカラズ

散茶ナルヘし夕ハ花魁

御職ナンヨクト訓ス吉原町妓院毎一家遊女ノ上坐ナル者ヲ称シテ
スハ勿論ノコトニテ又見世女郎ノ中ニテ見世ノ上座ナル者ヲモ殊ニ見世ノ
ナンヨクトモ称スル
同境内ニテハ御職ノヲイラカニトモ枝頭ト
京坂ニテハ御職枝頭等ノ称呼無シ

初會剛漆トシテ初會ニ与ス客モ早ニハ有レド具ハ客ノ心ニ叶ヒ長リ通フ心ナル者ニシテ多リハ三會目ニ与ルモノヲリ二會目ニ与ルヲ故ニ二會目ヲ
ウラナシトモ云ヒ又初會剛漆トシテ床花トモ云ヒ又初會ニ
惣花トモ云ヒ又新造ヤリテ若者及ビ妓楼ノ女房ニ至迄
皆床花ト稱ス二褶花惣花トモ云ヒ又剛漆ヲ付ルトモ云ヒ
二會目ニハ是非ナシニテ必ラズ剛漆金ヲ出スコトヽ記ス
初會ニテモ剛漆ヲ付レハ客ノ名ヲ
女郎ノ姉女新造等ニ客ノ名ヲ
又剛漆ヲ付レハ帰路ニ大門迄送レドモ
又呼出シ女郎ハ茶屋ヨリ迎ニ来レドモ
不迎ヒ

又剛漆前ハ帯ヲ細帯ニテ解クヲ解ヲモ解クトシテ寝巻帯ヲ解クヲ
又剛漆ヲ付ケル客ニハ客ノ定紋ヲ著セ
著ヲ製シ女郎ヨリ書ヲ遣シ
又京坂ハ官許ニ遊女ト雖ドモ剛漆金ヲ
解クヿヲ無ク初ヨリ名ヲモヨビ又帯ヲ
モ解クヿヲ無シ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

呼出シトき中ニトき上品妓則津金大概二両二分
得意ニ九分客座ニ二分客座下回ニ一分自家ノ
右ノ如ク大半頓ニ至ル此ノ妓ノ金ノ得ル一呼
見世女郎濃淡金一両二分ハリ
二朱十匁一両ハリ酌分前ニ准ズ
赤茶トハ則津ノ後ノ名ニシテ此金数定ナシ五七両或ハ十餘両客ノ随意ニ

手切義絶ニシテ高級ト内ノ金ノ
割ニテアリテヤリ夜具ハ事ヲ
ヲ蒲團ニ数シ又夜具ト金ヲ
具ヲヨルニ高級ニ無シ
又手切ニ非ルニモ則津等ニアリ多クハ臘月ニ有リ大晦日
ノ昼ヨリ女郎ハ見世ヲ張ラズ客ト新夜具ヲ得ル
下ニ小キ下ケ札アリテ某ト女郎ノ名ヲ誌セリ是ヲ正月載初ト
ス

女藝者 ナニナゲイシヤ 弾妓シ高級ニテ藝ヲ
ナス

昔ハ女藝者無シ遊女事ヲ云ヒヲ
ヘス故ニ当時ノ遊客時トシテ之ヲ
見世ヲ張ル時モ壽ニ弾ジリ是ヲ吉原ノミ
維ル毎夕夜見世ニ出ル初メニ絃者ノ新造繁
是ヲ朝トシテ衆妓見世ニ出ル蓋内藝者アリ家ハ藝者ノ所作
ヘス

前ニ云ル如リ昔ハ藝者ナシ宝暦中吉原扇屋ノ歌扇ト云女郎ニ
始ル当時此ヤセン唯一人シテ夫ヨリ漸リ倣ヒテ
ニモ置ク妓院茶屋ニ藝者ヲ置テ細見ニヤリテノ前ニ藝者某
外ヘモ出ス申継ト書リ其後年
官ニ請テ大黒屋秀民ト云者始テ
蓋昔ハ藝者ヲ進退スル一此
迎ル妓院ニアリシトゾ
吉原女藝者ニ二種アリ前ニ云ル如ク
町ノ藝者ニシテ多クハ裏店ナドニ住
アルモアリ此藝者ハ二人ツヽヲ一組トス
誰ノ合ニ某某ノ相ニ誰トセテ
此仲ノ町藝者一組二人ニテ一席
ヲ千ヲ云トセシ蓋初リ終日
又座夜ヲ座ヘハ二両一分十リ
祝儀ハ別ニテ与ヘルモ不与モ客ノ

是嘗ノ

高二倍ス大畧一組二金一分ツヽ

又内藝者ハ二人組ズ一人ヅヽ喚ビ又ハ二人アリ或ハ二人アリ或ハ三人アリ其ノ人ニ依テ差別アリ大見世ニハ無ケレド是ハ定メズ茶屋ヨリ藝者ヲ招ク者ヲ指ス

吉原中見番當時大黒屋庄六ト云女藝者二名一組ト定メ分内銀四匁見番ノ取トス且一年故アリテ一年ノ出入ヲ安政五年ノ出納其大畧右ノ四分定ヲ有トスル年入金二千五百両餘

同年出費ノ分　百八十七両二分餘

五十二両　俄狂言ノ費

百十両　燈籠ノ費

三百九十両　火消金ノ費

八十六両　會所ノ諸費

四十一両二分餘

二百五十両

十八両

三十両

諸吏官等音物

百両　千先佐倉

二百両　川ノ口ノ人

二百四十両　奴婢給金

出費合二千九百八十両餘

十三両

千両

本宅隠宅諸費

臨時諸費

菅垣吉原町見世女郎ハ黄昏三ツ半ヨリ夜見世ヲ張ル時内藝者ハ新造ノ役トシテ三絃ヲ見世ノ取持ニ吉事ヲスガキヲ述ベ又ハ祝儀ヲ多ク弾ニ菅垣ナドト謂ヒ隆ニ繁絃スルヲ今世ノ気ガキトス故ニ夜見世ヨリ始テ出ヨリ見世ニ例生スルヲ正面ヲ上妓トシ左右ヲ下妓ヨリ次第ニ出ヨリ見上妓ヨリ次第ニ出ヨリ見世ニ例生スルヲ正面ヲ上妓トシ左右ヲ下妓新造ノ坐トス此時内藝ト云ヒ二人ノ棟ノ席ノ隔ニ笠屏ヲ下シ鉦ヲ鳴ラシ笠屏ヲ下シテ障ヲ明クルト其次ヲ

声曲數藁曰清撰トキヲヒスガキト訓ズ和琴ニテ所シ或ハ菅垣ト云源氏物語ニ吉事ヲスガキヲテナド見ヘタリスガキハ清撰ヲ縛ニテ唱歌ヨリ曲ヲ撰ムヲ云ヒ手事ヲ弾ク故昔ノ盲人ハ和琴ノ清撰ヲ縛ニテ唱歌ヲ味線ノ手ヲ云ヒ手事ヲ弾ク故昔ノ盲人ハ和琴ノ清撰ヲ縛ニテ唱歌ヲアラヒト醒ヲ弱ハヨリ貴文棒行ノ条件和心集又元禄印行ノ大スサニスガキヲヒキノ川ヤラヤリ撰ヨテレハ又称日書ニ二上リスガキヲモスガキヲヒキヲヒキヲ曲ヤリノ宗用遣筆ニ合スガキヲヒキヲヒキヲ曲ヤリノ宗用遣筆尺八ノ条下ニスガキハ並世乱曲ヲ吹テ如古トヤリ云ヒ吹ニ中音ニ

「なのちまきの二ツ切ハ」ぞろぞろまびこよ

「まのの名花ヲケイ」枠ものハなれ〳〵ぞろまきてよ

ナドいふ新吉原へ移リシ比ヨリ事ヲ明ニヒテ合ノ手ニスガキヲヒキヲヒキヲヒキヲヒキヲ唱ヒヤリ後ニハ小手ヲヒキヲヒキヲヒキヲヒキ

茶屋　吉原モ古ハ揚屋アリ中古ニ来絶セシ今ハ茶屋ニハ双枕ヲ許サズ　客者ヲ揚ノ外酒肴ハ許ス女郎モ茶屋迄送迎ハスルシ　毎ノ席ニモ侍坐スルノミ

仲ノ町　七軒ノ茶屋ヲ分チ下ハ酒者ノ価ヲ号テ送リトシ妓院ノ送迎ノ料トスルシ　七軒ノ茶屋送り料一客金一分其他仲ノ町ノ茶屋送り二朱ヅヽシ

七軒ハ大門内右ノ七戸ヲ云　仲ノ町又揚屋町ノ茶屋凡テ百二十戸アリ

七軒ニ対スル向ノ七軒トヲ送リト称ス費二倍ス

田町編笠茶屋百六十餘戸　今ハ川手茶屋トナシ川手ハ妓院ニ通ズルノ号ナリ

龍泉寺前　茶屋三十餘戸　川手茶屋ト

山谷堀船宿又會所船宿ニ合テ八十餘戸是船宿ニ属ス

田町以下茶屋及ビ船宿ヨリモ吉原妓院ニ通ズルシ　惣テ川手トヲシ此ニ別ニ揚代ノ外送リトシテ金ヲ取ル　妓院ヨリ一客二百文許ノ銭ヲ与フ　茶屋ヨリモ亦取リ号テテ　コヅリトヲ小銭ト

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41　　ガラス使用

仲之町ノ櫻毎歳二月朔日ヨリ仲之町往来ノ正中ニ櫻樹ノ植ヘ
ニ植ルし此輩寛延二年ニ於テ今ニ至テ
晦日ヲ過ニハ枝去ノ明年又新

安政五年五月仲ノ町ニ花菖蒲ヲ植テ燈
ヲ以テ小川ノ形ヲ造リ舟板ノ橋ナドヲカケ
庭ノ如ク造リテ植ル
日六年モ植ク

日新燈籠毎年七月朔日ヨリ仲之町茶屋ノ檐ニ毎戸大燈籠
籠ヲ出シ十五日ニ再ヒ新ニ改メ造リテ晦日ニ至リ終ル
其始原ハ角町中万字屋嘉兵衛ガ名妓
七月八日死ノ日年中ノ町傾屋虎文楊屋町松屋八兵衛等
追善七月新盆ヲ祭ル為ニ此行アリト
後連年行ハ

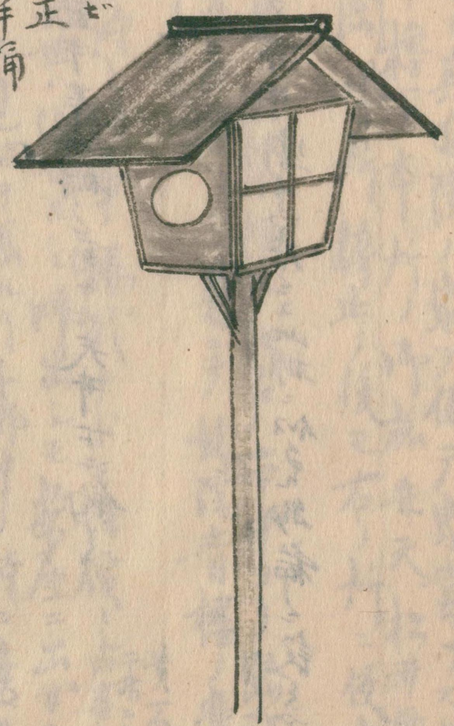
国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

八月朔日遊ず白袷ヲ着スヲ例トス元禄比ノ名妓四屋高橋瘧ヲヤミシ長ニ神客ニハ見ヘズ唯閨深客ニノミニ見ヘシ白ヲ取テミテ帯ヲ解シテ寝シニヨリ常ノトキハ閨會ナラン今日武家ニテハ白帷子ヲ着ヲ例ニ倣テ白袷ヲ着スナラン

廿日俄狂言 俄トハ下賤ニテヲコ毎年八月朔日ヨリ晦日ニ至ル秋葉権現ノ祭祀ニ擬テ行ヲコ男女藝者種々ニ扮シ男ハ芝居狂言ニ四落ヲ加ヘ女ハ踊リ新作類ヲ専トシ各囃子ヲ備ヘ行ク男女各舞臺ヲ別ニシ車アル小舞臺ヲ乗ケヲ造リ仲ノ町両側ヲ引廻リ巡リ終テ次ノ臺ヲ引来リ又行ク女舞臺男ハ廣場ヲ設ケ俄狂言ノ始メハ仲ノ町大文屋ニ桐座伊勢ノ比三ヤ角町妓館中万字屋トヤ者ト口気相求メニ三人寄合或時不面白ヒツキテ俄ヲ狂言ヲ始ヘ仲ノ町ヲ往還シケルニ遊客黄昏ニ及ヒ面白シト許判ヲ乞ヨリ彼人モ乗リ心来リ三ツ四ツ狂言ノ趣向ヲ取交ヘリカヘ中ノ町ヲ往還シ楽シケリ是ヲ俄狂言ノ始ニノ候ヤ高坂ノ俄モ是ヨリ移ルモノ歟考ヘ

タソヤ行燈

式人曰タソヤアンドウハ「タソガレアンドウ」ノ訛言ニ元吉原町ニ在ル時ヨリ毎院ノ戸前ニ建ツル今ノ新吉原町ニ遷リニテ亦不変ク今ニ至リテ江戸町各々中ニ此行燈一基ト戸前往来ノ正中ニ天水桶真千桶十バカリ積ネトヲ均ラズ置ク行燈ニハ俗夜燈ヲ貼テ往来ヲ照ス蓋此行燈ノ形他所ニモ用ヲ況タソヤノ名ハ書廓ニ暗ノミ



国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

綠儀棚　京城所無因東遊于町官許非官許妓院ハ主人ノ居間辺ニ千
茶屋ニ於テ常ノ神棚ノ外ニ又一ケノ神棚ヲ設ク常ノ神棚ハ鴨居ノ上六ケ所ニ釘ヲ打チ是ハ鴨居ノ
ハ袋ヲ掛ケ又此棚ニ成ル神大黒天等又ハ主人外信ノ神ヲ安置スル小社形ニ
祀リ前ニ錫神酒陶西辺若衆ニ榊ヲ遣建ル前ニ三ノ縄ヲ引キ等常
ノ神體ノ如シ
其傍ラニ赤或ハ金鉑紙張男根形ノ金鉑紙製小剃百両包形ニ二ツ拾掛牛ト号ケ
土牛形ニ縮面等ヲ七彩ノ褥ヲ重ネ置キ

四季ノ衆ニ先ツ春ノ蘭ヲ霜月ノ熊手等棚ノ前ヘ掛ケ天井下ニ釣ク

妓院青樓外藝者ノ私宅又市中割ヲ宅ニ此棚ニ似タル物神ニ設ケ祭ル

妓宅　中ノ多ハ吉原町焼失ニツノ再造ノ間昔ハ花川戸ノ又山ノ宿
又ハ浅草門前ノ葦町辺ニアリ妓ノ或ハ建家ヲ買ヲ是ヲ妓院ノ形ニ他ノ住家ヲ月収ヲ以テ改メテ
客ヲ迎フル仕来リ手茶ヲ下ヲモ其近隣ノ家ヲ仮ニ家業ヲスルヲ極意トシ造作ヲ改メテ
近年ハ深川仲町辺ヨリ檜下本所ノ南新弁天杉井町ヘモ
ニ妓宅モアリ天保有令岡場所ハ停止ノ後モ右ノ所ニ仮宅
ヲ出セリ

仮宅ハ家居兼ニテ廓中ニ不似ト雖モ
キヲ故ニ廓中ヨリハ繁昌スルヲ是ニテ妓院青樓ノ業モ
家造ノ料金ヲ得ル程ノ事ニシ

仮宅ノ時モ諸製廓中ノ時ト同事揚代ナドモ同便シ（貴人ノ娼ヲ二朱ニ売リ名由ニ非ハニテラズ）
仮宅ノ同ハ格子ヲ廓モ見世ハ張ガルシ呼出シモ茶屋ニ出ガルシ
銭見世ノ女廓ハ仮宅中モ見世ヲ張ルテ廓ノ時ニ変ルヲ
ヤシ

仮宅ノ焼ハ延宝四年十一月七日廓中ヨリ出火シテ大火トナリ本所迄焼ス
是廓開キ始テノ焼失シ此時ニ谷及ヒ箕輪ニ仮宅ヲ渡世ヲ許サルヽヲ始トス

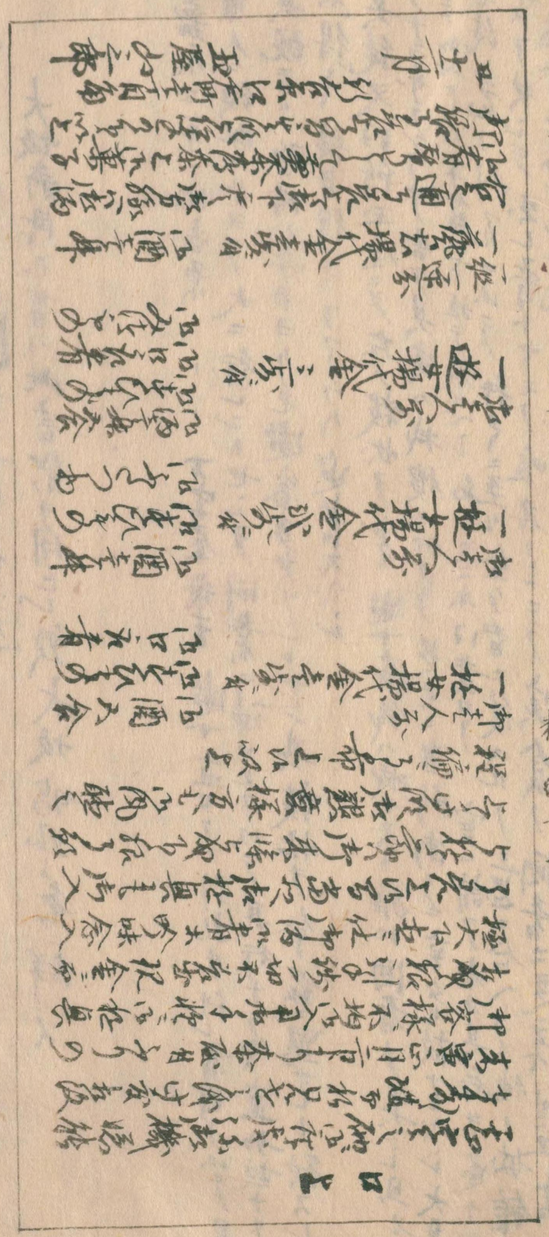
吉原詞 式人曰当廓ノ娼妓多クハ北越ノ産シ又江戸ノ生レモアレ
共所謂諸国ヨリ売リ来ルヿ故ニ常ノ訛ノ外ニ種ノ言語ヲ製シテ諸国
詞ニハ其移リ難キモアルヘシ此故ニ一種ノ訛言ヨリ移リ易カラントヽ云リ其

田様デゴザリマスヨ」「ソウザマスヨ」「イヤザマス」
「ソウザマスカヨ」「ナサレマスヨ」「イヽエ」
「アリイシヽヤ」「ソウヤデゴザリマスヨ」「イヤザマス」
「ソウザマスカヨ」「ナサレマスヨ」「イヽエ」
「アリイシヽヤ」

大坂新町モ昔ハ此言葉ヲ用ヒシ故大坂娼妓ノ条詳ニ

嘉永四年ノ北吉原一覧 万字屋蔵書 遊女古今ノ人数ヲ須臾スルヨリ大ニ行レントセシヲ同業ニ陣アルヲ
其説ヨリ暫時ハ平日ヨリモ遊客多カリシトナン真敷不得ヨリ後日得ヨトアラハ追書スベシ
真徒又口所玉屋ニテ左ノ数ヲ算ス遊女雇銭ハ減セズト雖ヒ酒肴ヲ美ニシ且今
少ナクサンニテナキ告ヲ真実ハ残儀ニ似タリ是ニ当所衰ノ大基
ニテ如此ナレバ半籍ニ推テ知ルベシ大基官ニ請テ未タ其行ヲ遂ケズ
其後ヨリ利アルヨリ行ヽニ至ル全ク昔ニ復スルヿヲ思ニ合ヘリ他ノ地雄ハ
古ヨリ実ニテ出ル者トテモノ唯名ノミニテ実ハ皆無ノ如キ者ニ至ヲ其甚キ
ヲ今ノ著ハル世ニモアルベシ

嘉永六年 新吉原 玉屋 遊女 鼓状写 原紙堅杉一会 横一尺三寸六分 縦八寸二分



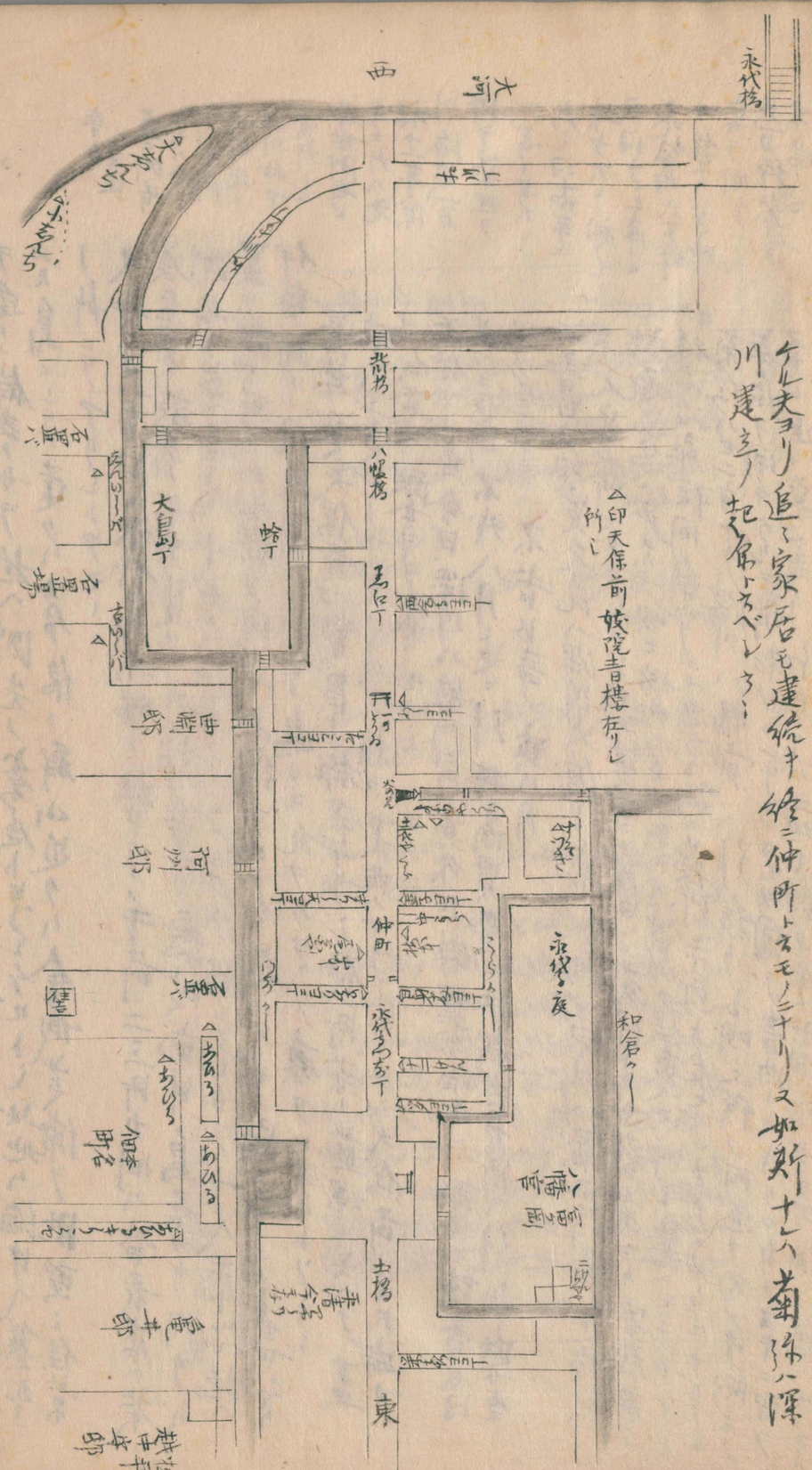
前ニ云ル如ク西宮屋ノ引札ハ行レズ玉屋ノ鼓船ハ遊ニ出ル如ク行レヨリ遊客後来ニ従ヒテ多クナレリ又不日ノ後大黒屋某ハ伊勢参宮ノ踊リヲ学ヒ遊ニ興ヲ行フ

武江年表 延宝年間記事曰永代島ハ幡宮ハ仁ノトヲ離レテ秀詰ノ人モ稀シヒカバ延宝ノ比社ヨリ手前ヲ造リ餘多ノ女ヲ抱ヘ洲先ノ茶屋トシ此地ハ海中ヘ築出タル島ニテ遠クハ唐土ノ辺山辺ノ外ニテアリシトソ

又紫ノ一本曰永代島ハ幡ノ社ヨリ手前二三町ノ間ハ皆表店ハ茶屋ニテ数多ノ女ヲ置テ客ヲ詰ノ輩ノ酔ヲ醒ス為ニ洲崎ノ茶屋トモ云ヒ十五六ハヤリノ二ノカタチ島ニテ遠クハ唐土ノ辺山辺ノ外ニテアリシトソ

又紫ノ一本曰永代島ハ幡ノ社ヨリ手前二三町ノ間ハ皆表店ハ茶屋ニテ数多ノ女ヲ置テ客ヲ詰ノ輩ノ酔ヲ醒ス為ニ洲崎ノ茶屋トモ云ヒ十五六ハヤリノ二ノカタチ島ニテ遠クハ唐土ノ辺山辺ノ外ニテアリシトソ

又紫ノ一本曰永代島ハ幡宮ハ仁ノトヲ離レテ秀詰ノ人モ稀シヒカバ延宝ノ比



ケル者リ追々家居モ建続キ終ニ仲町トカモノニナリヌ如斯十二ハ菊陽ハ深川建之ノ起源トスベシ

岡場所 オカバショト訓ス江戸土着ノ外非官許ノ地ヲ俗ニ岡バショトイヒシ 天保十三年 官命ニテ悪ヲ禁止ス三月 官命ニテ悪ヲ禁止ス三月 官命ニテ悪ヲ禁止ス三月

仲町料理茶屋。尾花屋。梅本。山本

つるや	さがみや	西の宮	中島や	九平	あたらや
吉深吉	吉政吉小さき吉	吉豊ひろまさ大吉	吉小いと小ちる小ろく	吉つる吉小ま吉てる次	吉ちる吉小ちさ
吉米吉八重吉	吉うら吉小ひろみ	吉与助小糸吉	吉小次公まち吉	吉ま八吉文吉民吉	
吉友吉	吉小つる吉小ろき	吉仲次千吉	吉さま吉小ろ次	吉てく吉つふみる	
吉小ちよ吉金吉	吉ひろ吉小ま吉	吉ち次三多	吉ち川さき吉	吉ま吉ふ	
吉八重吉つの也	吉ち川ひろ吉小ま吉	吉ち次もと	吉ひさいそふ	吉さまよま	
吉ちよきせ	吉ふくろう	吉そせふき	吉うちうち	吉てい吉き	
吉ろくこまこと	吉むらさめく	吉ろまさる			

毎戸各上ニ藝者ヲ抱ヘ詰ル下ニ女郎ヲ出セリ、時ニ仲町ト大新地ハ藝者ヲ貴ンテ女郎ヲ次トスル故ニ

鶴ヤノ一ノ上　相模屋ノ八重以下　西ノ宮ノ春以下　中島ヤノ玄川以下　九平ノさくい以下
難波ヤノみさ以下　女郎ノ名ニ藝者ト女郎ト名體異ナルヲ知ラセント此片葉ヲ写スノミ

相模屋以下陵籌字番ノ如クナレ共皆鶴屋ノ如ク自文ニシ今畧シテ葉节ヲ着ケリノミ

右尽ク花ニ所載

仲町　同玉椿　檜下　福ヲ　大新地　新石ハ
深川仲町　茶屋ノ名　尾花屋　梅本　山本　以上三ケ所ニシテ
子供屋ハ　鶴屋　相模や　西ノ宮　中島や　九平
難波や　福田屋　上徳や

藝者惣計七十七人　女郎六十八人　一日夜各銭三十六文　時扱
十二ケ所ニシテ時扱ト云ハ二時ヲ云シ又藝者女郎ニ日割下做ノ

同大新地　茶屋ハ　百歩楼　大常楼
子供屋　稲本　伊勢本　二見屋　山本

藝者合二十五人　女郎二十一人　上雇銭日前　仲町大新地ニ
桜売ノ合印アリ　初ヲ見ルベシ

同檜下　茶屋　若本　山口　東屋　出雲屋　上田屋　常盤屋
子供や　川越や　松本　中村や　大竹や　大隅や　藤間
表ヤクラニ所ニヨコヤクラニ所ニ　相模や　イセや　紀国や　井筒や　大里や

女郎ノ子八人　藝者三十一人　昼金一分二朱　夜一分　時扱二朱

同葭継　津国　中村や　田原屋
女郎二十二人　藝者十三人

昔ハ此三ケ所ニ四六ケ子郎アリ
入船町ニモ品アリ
仲町ニ俗ニアラヒル
四ケ所ニ出見世ニアリ

直助屋舗ニ地ホ、辞ニ来店ヲトヽ
入口町ニ四ケ見世アリシ

昔ハ土橋ニアリ
娼妓儀仲町ト
同制別ニ品シ
茶屋廿二ケ
子供屋十一ケ
娼百十四人
雇藝者八十五人

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

中洲
安永元年より
寛政元年迄
凡大河當時
郎前ニ又ト云
ヲ埋立拡所トス
汀ノ出茶屋
九十二戸
娼家壹ノ
妓者三十七人

大新地ノ内　中島屋　又号大椿楼ノ一戸他ト異シ
藝者十一人　女郎三十八

新石場　茶屋　亀や　坂田や　上総屋
女郎屋　小紅や　小杉や　此二戸ハ妓院ニテ客ヲ迎フ故ニ
子供屋トモ云ズ女郎屋トモ下做
ラシ

藝者十三人　女郎二十二人

十石場　女郎屋　豊倉　一戸ノ
藝者　六人　女郎十八人

裾継以下五所　並櫓下ト日割シ　櫓下ハ六所牡丹合印アリ

本所常盤町　女郎屋　虎屋　中田屋
女郎合　四十四人

日松井町　女郎屋　大吉屋　大村田
女郎　五十人

日御旅　女郎屋　和泉や　三春や　関本　小玉屋　藤田屋
女郎　五十九人

以上三所雇銭櫓下茅ト同製　紅葉ノ合印アリ　蓋此三所ニモ藝
者アレ凡其名ヲ記セズ原本ノ侭洩ス

日雑天　茶屋ハ「大和屋　若松　千代屋　釜由
子供ヤ」相模や　田村屋　女郎　二十九人
雇銭昼金三分夜二分　時狭一分シ　雪輪ノ合印アリ
以上辰巳ノ方ニ所数ス

弁天地名実ハ
八幡兵卫屋敷
弁天ハ藝者
十人

右ノ外町大新地櫓下新石場本所常盤町客ハ此茶屋ニ雇テ女郎藝者ヲ迎ヘ酒宴双枕ニ及ヒ其ノ費用ヲ茶屋ニ於テ
ス俗ニ是ヲ呼出シトス此内大新地ハ唐金御免ノ町ニシテ
セリ　外町ハ皆ナシ

又裾ニ　新地ノ大椿　古石場　本所常盤町　松井町　御旅等
別ニ青楼アリ　妓院ニ入テ酒宴双枕ニ及ヒ妓院ニ於テス
俗是ヲ呼出シトス　此内大新地ハ唐金御免ノ町ニシテ
供屋ト云　伏玉ニハ女郎屋トス　蓋吉原ハ昔伏玉ニ上妓ニ呼出シ
ト唱フ者アレ凡伸ノ町ニ客ヲ迎フルニ云ヒ吉原ノ呼出シ茶屋ニテ
双枕セズ自家ニ客ヲ迎ヘテ双枕ス

岡場所新ノ呼出シハ自家ニ客ヲ迎ヘズ妓院ニ於テ双枕ス故ニ一
人ノ女郎ニ一客也　伏玉ハ自家ニ客ヲ迎フ故ニ女郎一人ニ二三客或
ハ四五客ヲ異席ニ臥シ一妓一客々是ニ輪流スルノ俗是ヲ輪
トモ言シテ吉原同ク　床ヲ廻シトモ云ヒ床ヲ廻シトモ云ヒ
伏玉トモハ江戸古言女郎藝者茶屋ヲ玉トモ美人ヲ
玉ガイ帳ヲギヨクテフ玉帳シ課銭ヲタマセン茅ノ名アリ

右ノ雑天ト御旅ヲ金猫銀猫ト異名アリ　雑天ハ御旅ハ
金二朱而シテ地廓トシテ天保八年以来金銀一分並ニ用フレドモ以前ハ
一分ハ金製ノ二朱ハ南鐐一片シ故ニ雑天ヲ金猫トモ又天保三年金製ノ二朱ノ
イルハ二朱ノ二朱ハ南鐐一片シ故ニ御旅ヲギンマトモ其他ニモ

追テ
弐文金猫銀
猫ハ御旅ヲ
ニ非ス別
田町院前ニテ
金二分ト二朱ニ
テ名目スルヲハ下ニ云ヘシ

二朱を一分とせしと云ふ異名せず
又辻天一ツ目橋西し水茶屋ノ看板所
禁ずる故に客ノ婢等ヲ呼ンニ二階ノ窓ヲ
吉原以下今世無くなりし岡場所
徒に於てモ慶禁ずる処と云ふ
大新地ハ客品ヲ見テ行くべし遊女ノ如き仲町ニテ
客ノ二無時此地に遊ぶ者ハ
官ニハ女郎芸者共に利ナし
色ハ仲門大新地とも其他更に無し
喜撰ハ官許非官許ノ地共に芸妓ハ
罷や承ずノ二ツし三都
夢ノ意色ノ輩がトさし
是等ノ二ツ業御二不ず
深川見番ノ二ツ或ハ芸妓者ノ名ヲ札ニ書テ提ニし茶屋ヨリ呼ニ来し時ハ書れタルヲ
故ニ札ヲ見テ来ルトキハ方吉し芸者大夫共二来ノ揚代ナレバ見番ニ
芸者一分ト云ヲ須ケルナし

随得テ附記ス

品川細見 嘉永五年壬子板於吉原 蓋品川ハ武府西口ノ駅家
保ノ官命ニ諸駅家ノ遊女ハ不禁止ニ
妓ヲ飯盛女トシテ旅客給仕ノ婢ニ編
当駅妓品五等アリ妓院亦五等
ヨリ多カラズ大略三五人ヨリ十人ニ止メ弐八十二三人養者稀ニ
アルノミ
銀十匁ノ遊女合テ五十三人 金二朱 四十一人
銀六匁 三十八人 銀五匁 二百二人
通計 四百九十九人 六五四匁ハ銭六百文
四五六百文トスベ 六百文以下 六十
四寸ヲ小見世トス 五寸ヲ中ト
男芸者 十九人 女芸者 四十九人 男女共ニ
八三線指南ト記セリ

宿場

江戸ヨリ駅数ヲ宿トス 今俗ノ几ソ四日
各掲家アリ品川ヨリ一ト云ヒ 内藤新宿ヲ
四ト是妓品ヲ云 千住ヲ五ト板橋ヲ
東海道五十三駅ニ官許ノ妓院アルハ駿府ノ除勘町ノミ 其他仮盛女シ
真妓品ノ大略ハ品川ト称田ト曰ヒ俗称 岡崎 吉田 神奈川 真品何レカ勝レル
駅内ニ賣女多クハ草津 石部 水口
其他ニモ上下アリ右ニ及バズ 略ス
土山 坂下ニ
凡駅家ノ遊女ヲ古ハ傀儡トセリ ソノツト訓ニ近世ハ惣ヲ仮盛メシモリトセシ

官ニテハ是ヲ旅籠屋ノ飯盛女ト云
駅家ニテ賣女ヲ養ハズ旅人宿ノミヲ業トスル者ヲ平旅籠屋ト云 但巣ノミニ
称ス山西ニハ此事無シ

深川茅ニテ花ト唱ヘ金ヲ取テ春ヲ賣ル駒澤金ニ同キトシ凡三五會ノ時ニ至ル
但藝者ヲ陽トスル故ニ客ヲ密會ニ招スルアリ色ニテ呼フトキハ色ニテ呼ノ客ニ花ノ
ウタセテ寝トスル技モアレ共又花ヲウタセズ賣ヲ着リ技モアリ花ヲ売リ
ヲ花ヲウソトイフ言ヒシ
惣花部屋称ヘ娼家ノ妻ヲ及ニ娘ヲ孫ヲ稚娘「料理番ト称ヘ割烹ヲ客ニ
金一分廻ス「五」三階ヲスル女「六七人或ハ
八九人アリ「河岸番「小廿」二四人ヲ置「下タ働キ」抔向「仮禁
設針」街妙 各二朱宛
二階花ハ河岸番「若イ者ノ」ヲ置
又仲町ニテハ部屋ヲ以下日向ト云 果番「抱ノ者ノ」番ニ朱宛ヲ取ル

金見世トハ 檜下 御旅 神輿 新吉原 帯盤町 杉井町
吉羽 以上五所ニ 時鉄金二朱ナルヲ
モノアリ二朱ヨリ賣價ノ分却テ金見世トハ
其他ニモ 根津ノ木村屋 増田ヤ
駅家モ ヨシセトヲ
銭見世トハ 鐘ツキ堂ニテ 四ツ時ニ時鼓鐘アルハ本石町ニ十間ト入谷町ニ其他八寺院ニ有
向土橋 本竹入江町ノ内 横檜 檜下ノ 小新地 谷中ハイト
根津門内 日外 以上ヲ銭見世トス 一賣夜 銭一貫文 賣六百文
夜四百文ニ 故ニ四六見世トモ云ヒ吉原ニモ在リ

深川ハ下岡場所ト称ス非官許ノ遊女ハ凡テ
皆ニ料理茶屋ト云

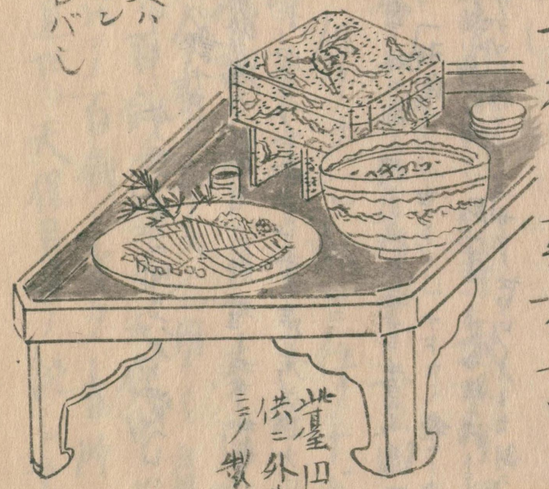
割烹店ノ酌婦名目シ割烹店

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

旋女藝者氏ニ枝院ニ舟ヲ賣ラズ花街柳巷内ニ自宅アリテ行ク者ヲ出居衆トイヒテ井ノヒト訓ス吉坂ニテ自前ニ同シ

江戸ハ吉原ヤ岡場所宿場氏ニ女郎藝者氏ニ聊ノ酒肴ヲ添ヘ歩ン若直ニト極ヘ時限等ノ金ヲ借ス時ハ又直ト者トイヘノ再ヒ者ヲ借ス事ヨリ色氏飽ニ至ラズ又酒肴ヲ欲セサル者モ偏ヲ恥ノ所ナレバ事ヲ別ニ酒肴ヲ命ス又引手茶屋ノ道サニテ上リタル俗ニ素上トイフ茶屋ヤ女郎屋ヤヨリ茶屋ヤモノハ女郎屋ノ下男ヲ呼イ者トナシ

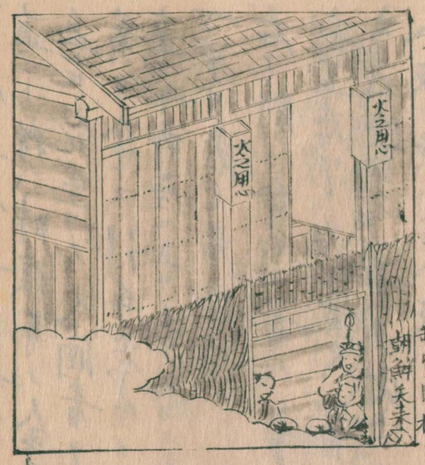
右ノ別ニ命ス者ハ茶屋女郎屋ニ自製ノ烟花施各々臺屋トヨリテ割主店アリテ壹ツ四百文弐ハ六百文ノ臺ヲ客ニ二朱ニ壹ツ又ハ六百文ノ臺ヲ客ニ二朱ニ壹ツ又ハ九百文ノ臺ヲ客ニ金一分ニ壹ツ又飯ヲ欲ス者ハ飯ノ臺トイフヲ添ル便リ前シ一分臺ヲ大臺トイフヲ又ダイト訓ス



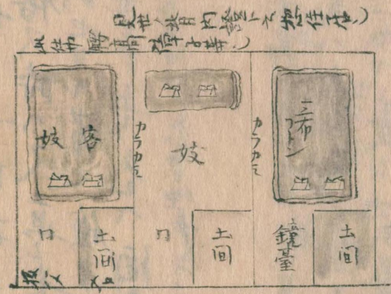
新小夏ニ訓ヲ記ス如何ナル氏後世ニ至リ唱ヘ誤リモアラン依ト記ス人ハ薩ニ大門芝増上寺等其他寺院等ニハダイモン新吉原廓ニハオホモンニト訓スノ類アレバシ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

守貞先年銅吹場ノ局見世ヲ見シテアリ一会ノ
四尺許ノ処ニ人ハ堪兼ル季ニキ人ナレハ誤ナルベシ
又予覚ヘシハ行燈ヲ柱ニ掛ケ板羽目ノ処ニ掛ケ
キテモ局内ヲ照スト思ヒシモ非然又銅打場ノ
業盲
前ノ洞考誰図抄出内ニ局ノ
アリ合セ見ルヘシ



局見世ノ画 局長屋ニ二階家ノ所多シ此ニ
切見世ニ暑テ長屋ニ 平家ノ所モアリ表
前皆同様ニ



局女郎客ヲ呼ニ動ク手
イヨイヨリ
上ノ画ニ鉄棒ヲ持タル者ヲ路次番ト云客ヲ留ル
時ハカナボウヲフリマワシ廻リテ「サアセワシイト云ヒ触ル

「御織サンチョット」「御ヤレヤレサンチョット」「町ナサン」
ナドヨビ種々ノ声ヲアゲテ呼ブ

局見世表間ニ各四尺五寸ヲ入口ニ尺ヲ用ヒ
二尺五寸羽目板ニテ奥ノ内土間板羽目ノ内ヘ
鏡臺等ヲ置ク

客ナキ時ハ各ヲ囲キ蒲團ハ表間ノ如ク帳ヲ
其上ニ掛ケ置ク妓坐ナカラ客ヲ呼ブモアリ
或ハ内ニ立テ隙ヨリ見ルモアリ折々其習ヒニヨル

客アル時ハ夜ヨリ寒ク物仕舞ノ時ハ毎
局隣ノ座敷ヲ除ク
泊リニハ夜着ヲ出シ一切枕ヒノ客ニハ敷布
團ノミヲ上ニ覆物無シ

切見世

本名局女郎ニ対シ蓋シ昔ノ吉原ノ名トス

吉原夜間場所ニ下當妓ノ名トス
切トハ須臾ヲ一ト切トハ一切銭百文ヲ
又ヒ雑リ多クハ一階弐ハ二ニ階ヲ蓋シ此切
スレハ客ノ高ヨリ銭ヲ定メ刻ヨリ多クヲ
四百文ナルヲ金二朱ヲアリ二朱ノ銭ヲ
文ヲアリアリ又定刻ノ外ヲ不アリ
此定刻ヨリ多クアルハ切見世ノミ客ヨリ
シ其他ハ若ヒ者或ハ中ルコトヲ嫌ヒアリ故
蓋シ無四ノ金弐ハ五節ノ小遣ノ金其他
雇銭ト別ナル故ニ上妓ニ手ニアラズ
又局ヲ長屋真女郎ヲ長屋女郎ト云
一妓ヲ置故ニ長屋トイヘリ
又此ヲ部ヲ鉄炮見世ト云ヒ俗此ヲ
称多クハ一回シ一回ナル故ニマニ往リ
鉄炮ト云シ又鉄炮ハ百目玉等ノ名アル
寛貞曰古キヲヲ後考スレハ博識ト雖ヒ自ラ筆役所會ヲ
アルベシ此鉄炮ノ名言ノ如キ今事ノ明シ後人若
論ズ考ラフアラハ切見世ハ百銭ヲ以テス天保中大銅ヲ
造ル天保通宝ト書シ一銭ヲハノ百銭ニ当ル故ニ
便ヲ天保一枚ナドヲ故ニ鉄炮見世ハ天保見世ノ訛シナドヲ

本所二望両ニモ同名世アリ

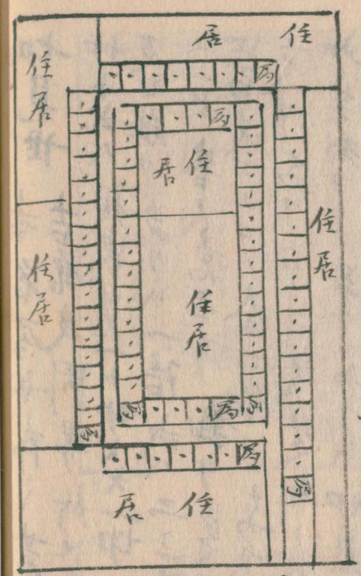
深川綱打場（本名松村町）　日アヒル海（一名本名佃町）　本所六ツ目

大シモ　以上四所ヘ口所

櫻木町　四谷舩谷　日駿ヶ橋　三田ノ二角　麻布ノ薮下（坂下町）

日市兵衛町　以上同場所ノ長屋凡十四所　追補　赤坂表伝馬町ノ番いろは茅ノ

本所阿武ノ長屋ハ文政末ノ天保初ニ廃ス



長屋ノ制　無宮ク種々ト雑ル大異略ス

蓋同場所ノ長屋ハ横ノ周リ朝霧矢来ヲ仕切ル竹垣ヲ回ラシ一ヶ所ハ両口アリ内ニ路次ヲ設ケ各ノ戸口ニ番夫ヲ置リ

路次口ニ番夫ヲ置ルハ路次ヲ廻リテ中ニ板塀ヲ建テ陽ヲ遮テ板塀ノ右ヲ往来トス片側ニハ板ニ造リ付ケ又ハ

追考此説面ニ誤リ路次ノ両辺ニ各ヲ構ヘ入口アリ内ニ各ノ戸口アリ

大意

吉原ハ元和三年ノ開基ニシテ寛永十八年ニ天保前当世ノ風俗移ル所ナリ良トスルニ足ラス深川ハ元禄年間ノ開基ニシテ寛永前当世ノ風俗ヲ移ス所ナリ良トスルニ足ラス特ニ吉原ハ江戸中央ニアリ道遠シト雖モ諸客ハ通フ事ヲ厭ハス深川ハ江戸中央ヨリ道遠シト雖モ諸客ハ船ヲ以テ往来ス故ニ吉原ハ江戸ノ繁華ニモ及ハス故ニ高家奉公ノ非番ナドニ遊女ト戯着民ニ交ルヲ許ス故ニ商家ノ非番ナドニ遊女ト戯着民ニ交ルヲ許ス故ニ商家ノ非番ナドニ遊ヒ又ハ品川千住新宿等駅家ニ遊ヒ又ハ品川千住新宿等駅家ニ遊ヒ又ハ品川千住新宿等駅家

奉ル難キ故ニ自ラ礼ノ標ヲ取テ勧ムルニ
江戸深川仲町等ノ芸者ヲ侵スニハ口歩金ヲ定メ
青楼ニ至ル青楼ヨリ芸者ニ与フル吉坂ノ枕金ト同意シ
江川芸者ヲ羽織ト称スルアリ昔ハ雅妓ヲ男扮サセ羽織ヲ着セタリ故ニ今モ名
ヲ鶴次竹八等ヲ以テス且天保比モ十四五以下ノ妓ニハ羽織ヲ着セス是ヲ豆芸者
トス
仲町ハ芸者名ヲ画ニモカキリ名容ヲ数輩持テ女郎ニ似タリ容ノ善ニ拘シ
キ者ヲ欲ヲ置ニノ故ヒニ行クモアリ此所ノ芸者ハ尊大ニテ女郎却テ謙退ス

町芸者　江戸芸者ヲ数ヘ古ヘ深川ヨリ市中ヲ指テ云シ橋
両国柳橋辺ヲ町辺堀江町辺京橋辺等ニ多
ク天保前ハ堺町葺屋町ニモ有シカ今ハ猿若町ニ有テ芝居茶
屋ニ出ルシ天保後ニモ堺町辺ニ再出セシガ書附名主能ク厳
刻ニテ此ホド酌中ニハ直稼シ易ク八天保ノ改革ノ
依芸子ヲ売ル者ハ許サス売ノニニテ色ヲ売者ノ如クニスル者ハ外ヨリ
ヲ呼ス奉公人ニ抱ヘ芸者ニ出スヲ以テ故ニ一ト一
ツ一人ヲ許ス一ト一ノ数人ヲ許サズ
如ク客ニ売色ニ迫ル者アル故ニ能ク此業ヲ為ル者甚タ
稀シ
町芸者モ称ハ柳巷ノ者ト異ナルヲ以テ
ヲ一階或ハ二階ヅヽ此一階スルヲ吉原岡場所
トシ又此定制ノ外ニ祝儀ト云テ金一分ヲ
是ハ客ノ意ニ任ス吉原ヨリ甚タ
京坂ニハ町芸子ハ無シ
江戸ノ町芸者ハ車ヲ以テ貨食店ニ迎ヒ
両国以下前ニ云ル外ニ下谷池ノ端仲町辺芝神明辺真但山ノ手ニテ有ク
是等ハ場所ニヨリ一席ニ来シ陽ニ芸者ト称スルハ私称ニテ酌人トヤヤ名
目ト云

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

封間太敷持ト云書籍及ニ岡場所ニ有ル
（法大黒ノ如キ者ニ似タリ）又男娼ヲ
一流ヲ誘リ某太夫ト称ス者多シ是等
宅到リ私ニ得意ノ客ヲ得セシム
野太敷ト云高坂有其人市無此名
（有ル）有藝ノ男子行ク其
ノ流ヲ誘リ某太夫ト称ス者多シ是等ハ太夫ト称スル又市中ニ住ノ
宅到リ私ニ得意ノ客ヲ得セシム是等ハ太夫ト称スル又市中ニ住ノ
野太敷ト云高坂有其人市無此名
（有ル）有藝ノ男子行ク其

地獄　場間ノ陰賣女ニ非ズ陽ハ賣女ニ非ズ蓋シ昔ヨリ禁
止ナレド天保以来特ニ嚴禁シ且民
地獄　吉坂ニテ白湯文字ト云尾名古屋ニテ百花ト云モカト訓ズ吉原
ニテ廣物ト云皆盛賣女シ
江戸地獄上品ハ金一分下品ハ金二朱ガリノ由シ自宅或ハ宿アリテ
或物乗ル俗ニ賣女ニ非ガル者ヲ地者ゴモノ或ハ素人氏ヤ其ハ地モノヲ極
密々ニノ賣色スルヲ故ニ地極ト市言ス獄極ハ通ヲ故ニ今ハ通ヲ地獄
ト云シ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

夜鷹　ヨタカハ土俗ノ云ヒ伝ヘシ如ク夜発ト云者ニ非ス辻君大坂ニテ蹴転　江戸ノ夜鷹ハ吉田町ヨリ辻君ト云者ハ今ノ屋台店ノ如キ見世ノ類ニテ日暮ヨリ書ニ立君ト云者ハ今ノ蹴転ノ類ナルベシ今モ京俗トテ辻君トハ云ズ上方ニテ蹴転ト云シ蹴像ノ一ト前ニ詩カラス

江戸夜鷹ハ本所吉田町ヨリ多ク出シ両国橋東　永代橋西　吉岡町ニ在リ

新吉原ハ元和三年ノ冬ニ始テ開キ葭原ト号ケ後ニ浅草ニ移リ今ノ地ニ移リシハ明暦ノ大火ノ後ナリ

吉原ノ遊女ハ昔ハ夜ノミ用ノ小座ヲ組テ数多ノ客ヲ呼ビ又夜鷹ト号ケ後ニ立チテ客ヲ引キ今ノ如ク一人ノ客ヲ定メ昼ノ間ニ客ヲ取ル事ハ寛永ノ頃ヨリ始マリシト云ヒ伝ヘシ

ギヤマンノ事ハ寛永ノ頃ヨリ始テ舶来セシト云ヒ伝ヘシ

寛延三年巳ノ利木　跡婦傳ニ載ル夜鷹ノ畫

今世モ定居ノ妻言ニ婿嫁夜鷹等ニ
移ル者多クハ黒棉布白手ゆ
カムリ縞ノ小ロニクワエし蓋帯ハ
昔ニ倍ニ成ハ巻ノ歴ヲ施キ携ヘリ

今世ノ夜鷹ハ専綿服ノ古農ル物ヲ着シ汚
ゆキノカムリヲバ多クハ前垂ヲ着ケリ

弐書ニ本所夜鷹ノ始リハ元禄十年九月六日数寄屋橋ヨリ出火シ四
ニテ千住迄焼亡ス其焼跡ヘ小屋掛ニ移
小屋ニ泊ル世ノヨキ時節故ニ若イ者往ヲ
始ルさ、

因記本所ヨリ出夜ノ名ヲ一年トシテリヒト
云ノ顔ヲヨセの運の月ノ字　何人ノ果ナルヤ詳ニセス曲ノ女ノ零落ナルベシ

船饅頭　江戸ニテ昔ヨリ此名アリ是ハ今世大坂ノ巳シヨトウト云者ノ如クニ
小舟ニ乗テ海泊ノ船ニ往テ売ル者ナリ

江戸通リ泊船ニ黄色ヌル者無ニ非ス
天保度令ニモ古着町ノ他ハ夜鷹ノ
ノ黄女ト雖ドモ皆禁止シ其後厳ク
ヤメキカ故ニ嘉永四年ノ夏ヨリ深川
ニヤタクリハシトテ橋ノ左右ニ茶船ヲ
此船中ニテ黄色ヌル土妓ノ類ヲ
置リ化粧モ本式ニ粧ヒ客見テモ船ザ
皆ヲ待ツ者十人バカリシ口折ニ粧
黄ル者十所バカリモアリテ初メハ大ニ販
リテ毎時休ニハ再行シ今モ亦行
ノ如ハ更ニ廃止ラ無ク

昔ハ泊船ニ饅ヲヲ売トテ舟ニテ黄色ヌル故ノ名ニテ天保ノ令ノ船ヲ十ト八其ヘ
行ヨリ何ヒ時中絶セシヲ天明ニハ有ク
ト異名セル高名ノ婦アリシヲ式書ニ見ヘタリ

川張り　ヒッパリ天保以前ヨリ有リ　蓋以前ハ往人繁カラサル折ニ出テ人ヲ撰ミテ袖ヲヒキ　或ハ書バヲヤカテテ動ムルシ　遊女自ラ出テ動ク　或ハ遊女ハ宿ニ在テ老婆ナド出テ動ク　客ヲ宿ニ伴ヒ帰リテ上臈色セシシ　近年ノ川バリハ堺町　往来繁キ折ニテ出テ動ク　或ハ堀江町　小伊町　四ノ町　小川岸ニイニテ動ク　宿ニ伴ヒ帰ルヲ稼ト云ヒ　有ルト聞ト雖ヒ多クハ惣創ニ伴ヒ立テ文合スルシ実浅間敷行トシ　一文大果四十八銭ガリシ多クハ四十歳ノ婦ニテ若キ女ハ甚タ稀シ　持ニ衣服モ甚タ粗末ナル者ヲ行ル　ヲ政ノ比ニ至リ盛ヲ行ル　ヲノ下ニ　諸川岸大果者ヲ一名ト称ス　上臈ノ川張リ出ルトシ　色ヒヒ宿ニ伴フトキハ盛ナルベシ　別ニ一種異名ナルヤ如リ乃チ昔ノ夜発ナリ

風呂屋　遊女　太平記巻之三延文五年ノ新ニ今度ノ乱ハ云ヤナガラ畠山入道ノ新行也ト路書ニモ歌ニモヨミ湯屋風呂ノ女童部迄モモテハヤシケレバ云ヒ　真ニ京都ノ盛ナル事ニ　肯葺集ニ此文ニ注シテ湯女ナドモ在シヤリニ聞ユル

武江年表　慶長年間記事曰　此時世風呂屋湯女流行出ル　真下ニ細書シテ　見聞集ニ天正頃ノ銭湯ノコトヲ記シ其比ハ風呂不斟酌ノ人アマタアリテアラ麁ノ湯ヲ呑ノ意ガツニリテノ物ヲイハレズ　烟ニテ目モアヤレ又ナド云ヘリ　小風呂ノ口ニ立寄リヌルヲ風呂アリ　銭十五銭ツヽニテ入ル　正銭ツヽニテ入シ湯女トキテ十マメケル女ヒ五人三十人垂ニ居テ垢ヲ中髪ヲヌイ　扨又其外ニ容色類ヒナリ四十ニ優ヤサシキ女ノ房ヒ湯ヲヨル茶ヨトニテ持来リ戯レ浮世ガタリヲナス　ヲヽトアリ　良穂集ニ風呂屋江戸ノ折ニアリ　朝ヨリ晩ハ七時ニ仕廻ヒ内風呂入人ノ垢ヲ流シ湯ヲモ七ツ切リニ仕廻ヒ　夫ヨリハ外ノ女湯ヲ整ヘ暮時ニ至リルヘハ風呂ノ上リ場ニ用ヒタル捨ヲノ間ヲ坐敷ニ構ヘ金ノ屏風ナド引回シ大ヒ燈ニ件ノ湯女ヒ小哥ヤリノ物ヲ語ヒ客集メヲセシシ　右ノ風呂屋木挽町辺ニモ一二軒アリシトカヽ

義日書　寛永十四年　江戸中風呂屋女三人張リニ者　吉原大門ノ外ニテ刑セラルヽヨリ書ス　寛永ノ比迄　神田佐柄木町ノ内屋敷アリ　丹後殿前ヨリ此辺ニ風呂屋多シ　美麗

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

ナル湯女ドアリテマヽニ遊ビケル若人等ノ様ヲ歌舞妓ニ学ビテ毋前ルトシテ諸書ニ見ヘタレバマヽニ畧ス

日書慶安元年江戸中ニ風呂屋ノ始ト遊女ヲ禁制アリ

イト多昔諸大名ノ松平毋後等屋敷前ニ風呂ヲトラ遊女ヲオクヽ諸人入込喧嘩度々ニ及ヒ其時ニ風呂ヘ通フカブキ者ヲ異名ニ毋前ヘカケル人ト云毋後等前ヨリ少シ今ニ伺ニテモハテナル風ヲ毋前ト云ヒヨリ〳〵ノ由ナリ

日書諸国ヲ寛永十二年ノ比ヨリ町中ニ風呂ヲヲ抱ヘ置キ昼夜ノ商売ヲ仕出シ是ヨリシテ吉原ヲ始メ其頃ハ人ハ風呂屋女ヨリ仕出シ傾名ト云ヒ元吉原ニテ両隣ノ時ヲ〔遊女数ニ雨ケ〕見ルベシ又十二年流布シ十四年風呂屋一ト三人ト定メラレニハ満上リヨリ此命アリシ

日書古勝山ハ元神田毋後前津ノ国風呂屋ノ市兵衛ト云ヒ風呂屋ノ下手ヲ仕回勝山ヲ親ヘヘ湊シ遣シタルニ勝山ヲ親相対ニテ芳閑ガヘ舟ヲ賣ヲ又遊女ヨリ勤ヲ移リ彼風呂ニ在ル時ハ玉緑ノ綸笠ニ裏ヲ付ケノ大小ヲサシ物詣ナドヲスルニ風俗勇々シクリテ市行様ヲ本ノ歴々ノ気ノ如ク見ヘントシ多門左門ナドヲ芝居者ガ彼ガ風ヲ真似タリトテ毋前ヲ勝山ヨリ起リシトゾ神田毋後前ノ勝山ト云ヘル由ヨシ

南洛ノ翁ニ評ヲ乞

弐ツ
明暦三年禁ス
当時風呂ヤ
ヲ二百餘アリシトヨフ

江戸丗前風呂古画

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

京坂ニモ風呂屋稼ヲスルアリケリ
貞享印本 難波鶴ニ風呂屋
十四軒ナドトアル是ナリ

好物訓 素訓画業ニテ画ヲ出シ
テ真俤ニモ
湯娜 一名フロヤモノ 機
紅葉風呂ノ
蘇

日書ニ風呂屋モノハ煤竹
玉子色ノ木綿衣裳ニ黒羊羹
釐甲ノ指櫛 襟高ク袖寛ヤカ
ニヒトシ ニヤニヤトシテ物ヤモ風俗ヤカマシク
烟管手ニ放サズ 酒ブリ前ニ豆ノ時ノヤリヨシテ
枝茄調ヲ高ク世統曽我ノ道行ナラヌハナシ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

前ニハ湯女ト書ヒテ ユナト訓ス後ニハ湯郷ノ字ヲ書ケリ 藤ハ書時ノ高名ナルベシ又二都ニ一名サルトカヽシ
今世モ摂ノ有馬ノ温泉ノ坊トカ旅宿ニハ各大湯女ト湯女アリトニ
オユナマユナト訓ス如ク昔ハ晴ニ臨テ三位ヨリ歌ナドハ唄ヒテ酒席
ノ興ハソヘシニ 遊女ト書ケルヨリ下ハ十リ浴事ヲ客ニ告ルヲ専トスルノミ
又大坂島内ハ近年迄右ノ風呂屋女ノ遺言心ニテ垢摩ナニ繕ケテ
娼妓ノ如シ蓋近年ハ浴事ノ下吏ニ無ラシト維ル 摘風ノ旨ヲ以テ
トスルヿ島内ノ条ニカヽ如シ 天保庚寅後ハ アカスリヲヲ止メテ新
町ノ廓城ヲ除キ内地 廓外ノ 娼妓ハ皆 旅宿ノ飯モリヲニ繕ケテ
官許アルカ如リノ存セルシ

右ニ云ル如ク昔ハ二都ニ風呂屋女 続行セシガ 今世ハ此営色タヘテ
有ヲナシ 京坂モ日時ヨリノ禁止歟

熊野比丘尼 東海道名所記曰 イロノ比丘尼ノ伊勢熊野ニ詣テヽ
行ヲ勤メニ其希ヲ皆 伊勢熊野ニ参ル 此故ニ熊野比丘
尼トカリ其中ニ声能 唄ヒケル尼ノアリテ 唄ヒ
哥ヲ唄ヒケリ又熊野ノ縁ト号テ地獄極楽ノ絵ト号テ
ナキテ 絵解ヲイフカシ奥深ク御経ヲ 理セスヤ
ナンドモ 可イナケレハ 後世ヲニラヌ人ノ
ヲヽ勧メカリケルシイツノホトニカ 唱ヘ失フテ
行ヲセセズ 中昔 絵解ヲセニラズ 歌ヲ肝要トスヽキトアリカシヘ
昔ノ勧進比丘尼ハ 地獄極楽ノ絵巻ヲ 絵巻ヲ
佛法ヲ述メカリキ 一ツ賞永ノ比ニ至リテハ 夫ヲ異ニシテ彼画巻ハ手ニ
持ル斗リニテ 比丘尼二人向ヒ居テ 絵解ノ言葉ニ 節ヲ付テ
唄ヒニヤト覚ユ 延宝貞享ノ比ノ作本日次記事一二月條云
中尊作御事一民間請熊野比丘尼 使ニ説ニ極楽 地獄画異譜
揭画ヒトアレハ延宝貞享ノ比迄モ其ノ風儀ハアリケンカシ
骨董集ノ文ニ 日書ニ天文前ノ 枚歌合ニ絵解ト
云者アリ 有髪ニ烏帽子素襖ヲ着シ
ヲツケタルハ 絵巻ノ 損セザル為ニテ 絵巻ハ年記書シトヽテ赤ダリ
ノ下ハ暑文シ

我家曰 牛玉黄ノ比丘尼ハ元来熊野 牛玉宝印ヲ売リニ出ル比丘尼ナリ
宝印ヲ入ル文庫ヲ持チ 櫛ニ 勧進 柄杓ヲツサシテ 糸ヲモラワセ
タル 袴行シ 貴文ノ頭ハビンザヽラヽリ 此時ヨリ持チ歌ヲ唄ヒシヨリ 小賣ヲノ兆ヲ顕ハセリ 天

和ノ比ヨリ世上ニ遊ヲ業行スルニヨリ簡様ノ族ヲ書ヲ
タリ然ル元来僧形綿服ノミ着セリ天和貞享ノ比ハ浅木木綿
白キ帯ヲ浅木ヲリ素足ニワラヅリ
腰ニサシ腰帯オシテノ文庫物ヲリ元禄ヨリ
着ス是ヲ種々ノ色ノ布ヲ用ヒ着ス是ヲ異ト云ヒ笠手ニモ
文庫ヲモツ宝永ヨリ小比丘尼ニ
元禄ヨリ中宿アリテ是ヘ行キ一夜
宿ヘ帰ル昼ノ内彼中宿ニアリテ
ノ食店ヲリ又八官町佛堀通リ町家ニ出ル
ニヨリ正徳比ハ芳場町俱屋敷ニ
屋敷服ヘ引ク往来ハ綿服ヲ
綿八丈ノ紅裏模様ヲ着又夏冬黒縮緬ノ被頭巾ヲ着又
ハ長ニ揃等ヲ又遊女ニヒトシク腐上ノ有サマシ其比浅草ノ門跡
ノワキ法国寺前ニモ中宿アリ是ハ芳町
ノ辺ヨリ出ル又深川新大橋向ヨリ出ル安宅丸ノ跡ノ町家ヨリ
是ヲアケ比丘尼ニヲ下ロシ四ツ谷屋
小屋敷ノ門前ニ寄合辻番ヲクノミ宿ヲ宮保元年芳停
町白越後屋ヨリ八丁堀北手越中屋敷北辺鳥井丹波屋
上リ屋敷ノ跡ヘヒケ貞保二年ハ官町ニ仮中出来ル辺ニヨリ
黄女ニヲチ丈ヨリ中宿叢林ヲシ延享二年迄神田ノ宿ヲ客
ヲ泊ルトヲ此比ハ又ヽ何リヘ行リニヤアラン往来スルアリ

心中ハ情死ヲヽ

小町

医師ヲ治法印行脚ノ如シ

文化十一年写本ノ塵塚談ニ勧進比丘尼売女比丘尼ノ事
事比ヲル比丘尼ビンザヽテヲ唱ヒ歌ヲ唄ヒ小比丘尼ヲ召連レ乱レ箱ヲリ
ナル宿ヲ泊ヘ小尼ニ柄杓モタセ門々ニイテ米銭ヲモラヒ行ナリシ
売女比丘尼ハ芝八官町神田横大工町三ヲ美服ヲ着ヲ売ル由是ニ
続キテ下直ノ比丘尼ハ浅草田原町日ニ三島門前新大橋川端ナドニテ
家毎ニ二三人ツヽ出居タリ右両様ノ比丘尼ニ売女比丘尼ト二物ノ如クニヤリ
勧進比丘尼ハ今ハ絶テナシヽ当時ハ
寺貞ヽ熊野比丘尼勧進比丘尼歌比丘尼ヤリニ同ヽ

元禄七年刊本西鶴織留ニ伊勢ノ二ヲヽ条ニ此廣野銭掛雲ノ辺リニテ
四五年以来道者ニ取リ付テ世ヲ渡リシ女ノアリケル所ヲ
人異名ヲ着ヲテ取付出シノ寿林古狸ノ清春トカヲ通ヒ馬士
駕籠竜造モ見ニテヌハナシ一両年ヲ限ハズ立寄テハ伊勢ノ松山ノ裏松
正福広ノ書家ノ師走ヲ家ヲ正備前岡山ノ女中ヲヽト人ヲ見立テ
国所ノ遣フヲ千百ヲニ一度ヲリヽ

古来ハ如斯ニテ最モ古風ナリ

我衣折我ハ兩ノ袂ニ頭巾着ケル頭ノミニ而ヲ出セルニテアリ折蔵ノ寫本傳写ノ誤リ少ナカラズ此画ハ特ニ誤レル後ト思フ故ニ錄画ハ異ナル事ヲ得テ追画スベシ唯其画上ノ文ハ記スベシ

頭巾モ古来ハ浅木毛綿ノ帯体シ元祿ノ世ヨリ長頭巾ノ者アリ

画畧 浅木頭巾ノ比ヨリモミ上テ流行故下ハ細物ニテ針ヲ以テ止メタリ

日

吉保ノ比ヨリ黒頭巾如此ニ折テカブリ代ヲ剃リテ髪ヲ覆ヒ長ズレハ袂ヲ折テモミアゲノ外ヘ下シテ掻上テト見スルシ 宝永正徳ヨリ長リハ十ニ

日

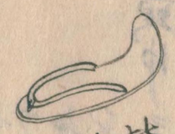
画

中着ニ在テハ黒縮緬ノ頭巾ヲ著ス

吉来上絵畧 黒縮緬ノ頭巾元祿ヨリ加賀畧 宝永ヨリ

針銅像ノ如

加賀笠 紅絽縫入 絽羽織用ノ
針ヤなブチ加賀笠 極上品 帯ノ女ノヤウル品ニ非ス 細フトリ者絣シ
アヲモ白リ大ブリニテ 上景保ノ末元文ノ
ハヤリ印ノ下ヲ物ヲ有リ 延享比ハ女ノ衣服
セサレ共日五年ヨリソロソロト元ノ如リニナリ 真比ハ女ノ衣服
浅葱小紋 中形ハヤル故ビリニモ 中形ノ
煤竹茶ノ絣陵ニ紋ヲホサリ有ヲ男ヲノ
着ク是比五尼ガ 紋有ヲ着ル 婦メシ
帯ヲ的高ニムスビタリ 上景保ヨリ 幅少シ
キ平クケシ 結セサゲニハセズ



笠尼雪踏切廻シ 玉子掛ニ緒 鉄打 屐ノ
造リタリ 王文ノ末ヨリハヤル但シ 餘人ハ用ヒズ 比五尼ハヤリ用ヒ
足駄ノ歯モ 凵ニトリ 緒ハ玉ルゴ 漆ヌリハ用ヒズ

風俗ヲ掲ク 往来スル故ニ歩行 寛保ノ嚴禁ノ時ハ中以下ノ
比五尼 古来ノ如リ勝手ニ出ル凡一年間ニ 拠比五尼ノ容体ハ眉ヲ
剃ズ 白歯ヲ磨キ 紅ヲツケ白粉ヲ塗ヒ 月代ヲ中ガリニシテ
男ノ元服ノ如リ異体ノ者シ 正徳ノ比 深衣帽子ト云者アリ
中村原ノ太夫ト云女形ノ役者ニ似タル故ノ異名シ 又宝永ニハ鶴ト云
高名ノ比五尼アリ 日宿ヨリ小鶴ト云比五尼 出タリ 是ニ宿ハ
神田ニ日店ヨリ出アリ其比何レノ都市吟味ヨキ時節ナレバ
自然ト隙ノ間比五尼 京坂ニモアリテノ 印尺ト異ナルテナリ
本名熊野比五尼後改比ト号行リニヨリ歌比五尼ト云シニ都ヒ比名シ

右ノ隙比五尼 京坂ニモアリテノ 印尺ト異ナルテナリ
本名熊野比五尼後改比ト号行リニヨリ歌比五尼ト云シニ都ヒ比名シ
サレ 時吟味アリ新ニ 役鶴比五尼ノ如ヘギセルニテ 剃ヘ往タルノ上日ヲ
一人申上ル則鶴ト言上ノ者ト對決アリ 如
変ニ大罪ニナル聊ノ事ニモ 即陰ヲ学ラサル 故ニ斯大罪ニナリタリ
さく

上貴き印本
拍物訓蒙画彙ニイワノ比
ヨリ抜歯ハ水晶ヲ表キ
眉細リ墨ヲヒキ黒ニ帽ル
オモワリテヒリ被キテ賀
笠ニハテ緒ノ重貼小歌ノ
ヨスガニニテクロ〳〵ト
エホノ目元ニワケテノホノメ
カセさく

比五尼 一名冬す
ナカヨマルタ
トカナイ
セイ

鳥辺野
ノ女

上貴き色ヲ専トセシニ
都ヒ比名シ

天明ノ弐書ニ大橋辺ノ比丘尼百文ノ由オリノ前ニ云安宅北丘尼ニテ下品ナル者シ

右ノ衆皆ビ詞ヲ睦錄小錄ニ載テ云天明比迄ハ十歳以後ノ小比丘尼黒衣巾ヲ被リ袴高リヒキアゲ拍板ヲ打サシテ小比丘尼四五人ヲ老比丘尼一人掌領シテ市中ノ門毎ニ立チ小歌ヲ唄ヒ米銭ヲ乞ヒ取セザレバナヤナヤトイヒテ催促セルガ今ハ絶タリ上市ニテ十手ヲ捨ル事ハ熊野比丘尼ノ地名書ハ比丘尼ノ名貞享中ノ京師ノ高名比丘尼ニナルベシ又歯ヲ磨キ眉ヲ描キ黒衣巾ヲ脱ギ袴ヲ着ケ比丘尼ノ拍子ト相似タリ唯ノ京坂ニテハ名ヲ謂ヒ扱ヒ召ヲニニテズ江戸ニテハ諸事ノ物ノ本多リ故ニ此比丘尼等ノ事ヲ載書ニ所載ニ京坂ハ如此ノ本ニテヒロヒ見ズ唯手近キ江戸ノ書ニ天明比迄ノ事ヲ記シ天明以前ニ貴キ是ノミニハアルベカラズ蓋シ見ニ及ザルニ外所載物未見ニ及ザル蓋シ天明比迄ハ比丘尼等ノ事ヲ載書ニ所載ニ京坂ハ如此ノ本ニテヒロヒ見ズ唯手近キ江戸ノ書ニ天明以前ニ貴キ是ノミニハアルベカラズ蓋シ見ニ及ザルニ外所載物未見ニ及ザル蓋シ

色ノ几ニ廃ニテ門ナニ立テ米銭ヲ乞ヒ事ト廃絶セシニ又高坂ニモ当時ハ彼比丘尼廃絶セシニ此比丘尼其始ヲ知ラズ貴文ヨリ凡貴ヘテ歌ヲ唄ヒ天和ヨリ貴ニ元禄ヨリ中宿アリ宝永正徳享保元文寛保ノ間盛ニ行レ寛保一ノ七中宿ヲ禁スレドモ亦其禁弛ヲ再ビ行レシガ又衰ヘテ安永天明比ニ至リ三都ニ廃絶セシニ

武江年表天和ノ条ニ比日流行リシ唄比丘尼由リ出ル永云於姫於雪長傳トカガ名取ニテアリシトゾ編ヲカノ事ニ有リシ

風呂屋賣女 熊野比丘尼ニ昔在ルコト
無シ

諸書ニ載スル所ニ申古ハ未サラニ

桂姫

桂女カツラメ昔ノ遊女ニ山城国桂ノ里ヨリ出ル 永禄三年 御成記 夏ヒ
三有之皆足利幕府ノ時ニ幕府等ニ召ヤシ二供 手申 但御記 富山記等
行ニ猿楽ト日前ニ又日桂ニ八門送ナシ白拍
傾城ニ八少シ座ヲ上ニヤリニシテノ禮アリテ白拍ノ
ノ御腰帯 所傳ノ由ニテ 幕府御臺腰妊ノ時 奉ル 神功后
リ此桂女ト八異ナリ此桂ヲ山城ノ桂里ト今ハ彼里ニ遊女ナキニ

加賀女カガメモ昔ノ遊女ナリ 加賀回ヨリ出ル遊女ニシ是モ足利幕府
加賀幕ニ曲アリ 加賀女ノ謡ヒニシ 真後中絶中世 江戸ニテ再作スルニシ

綿摘 武江年表曰 寛永ノ頃迄アリシ口タツミトキニモ土俵ニテアリシト
綿摘ノ座婦ニ綿ケテ賣女ニシ
座塚談曰 イマハトキ妓女ノ
ケマト
寺屋町 提灯店 仏店 ト
迎真外諸所ニアリ是モ一同ノ業ニ
貫八二百文ハ二三人ヲ限リニ出居ルカ
日十八日ニ八出居高ニ七ニシ寛政以来此賣女絶テナシ

提重 此女ゲヂリトモ賣女ハ何ノ比ヨリ
老ノ話ニ往々真名ヲ聞ニ提重皆ニ食類ヲ例シ賣歩行ヲ

結ケテ青色セシシ彼錦摘ト内意シ
締テ多ノハ寡夫独郎者寿ノ家ニ

○蓮葉女ハメト訓シ其実ハ大坂同名ノ妓
故ニ愛ニ追書ス大ど文政
天和二年印本西鶴一代男ニ難波浦ハ日本第一ノ大湊ニテ諸国ノ商人
家ニ集リ又上同屋下同屋ニ蓮葉女ト云物アリ
揚ヤ買又ハ飯焚女ノ見ヨゲナルガ下
黒キ大帽帯赤前垂吹髪ニ京舞仕
真紙ヲ見セヤリ其外将夫トハ隔ケテ
居客ヘテノチヨリ〳〵出行サビラシヤウスルカ故ニ此名ヲ付又
栄ヒし大門屋敷雑仕ノコトヲ柔下日鉦鐘町ノ上ル
多ケレハ名ニ立ル蓮葉ニ

守貞ニ今俗ニモ下事思高ノ浅キ
トヲ蓮葉女ニ似タルノ意ニ

鉦鐘町時鐘ヲ打ル町名ニ
城西ニ在リ大河南ニ町ニ筋ノ町ニ昔ハ世
西市ノ市街ナリヲハ同屋復ナシ

提重ノ追ニ思出ス世紙ニ寛政中隆
地面ヲ取上ケ家作ヲモ前スヨリ初テ
ヨヘヘトヲ女高人トナリ武家ニ入又ト
ニ黄色セニ

大根畑ニ此ヲ此頃ヨリ町家ニ改ル後ハ料理茶屋ヲ少シ女ヲ抱ヘ酌ニ出ス世人
大根畠ト号スニ
又式書ニ云昔ハ大根畠ニ二長家トアリ是ヲ四六ノ裡ト云
マヽニ通ノ客ニ五六二トヨリ二崎ノ六ガ娘相方ニ出ルモナカシ
フヾリノ面見ルヨリ二世ノカタメヤ
後ニハ局見世モアリシナリ三ヲ指ハ三ノ
方言ニ實目三ノ指即チ四六ノウラヲ裏名セレナリ

其形持夫トヘ隠ケテシ
妓夫ノ字
ソレト訓シ
黄色ヲ指ヘ
高シ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

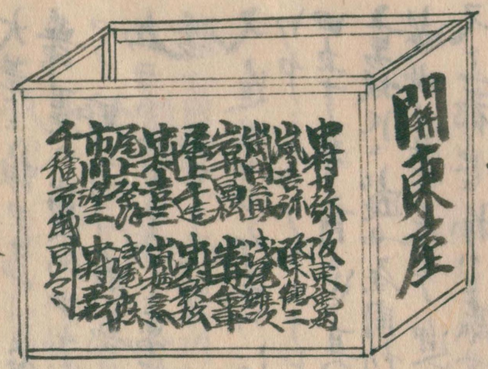
俚俗ク ツト訓ス古ノ駅家ニ愛女菩ノ名トス中古ニハ里ヲ用ユルコトヲラリハ邨落ナラン オゴヤレノ来歴考今世ハ此後ヲ飯盛女トスメモリ ヂョト訓ス官ニハ飯売女トモ 下総船橋駅ノ飯売女ニ結ケテ髪色スルヲ国ニテ豆ガ下田ノ蜜売女ヲ異名ニテ「ウコヤメ」トモ洋人ノ妾ヲトナル女ヲ異名トヲ「ウコヤメ」トモ洋人ヲ唱ル俗ニ羅紗ノ事ヲ綿羊毛ヲ用ノ又武州横浜ニテ西洋人ノ妾ヲトナル女ヲ異名トヲ「ウコヤメ」トモ洋人ヲ唱ル俗ニ羅紗ノ事ヲ綿羊毛ヲ用ノ江戸周旋中ニテ国人詐ヲ洋人ヲ欺ハ犬及ビ綿羊ヲ犯スト思ヒ其大羊ト同リ意ヲ妻妾トナルヲ畢メ雑夫假名ヲ以テ羅紗ノ事トスルト思ヒ違ニ通称ノ如ク二ナル此名目後人思ヒ誤ルコトヲ思ヒ序ニ愛ニ筆ス

男色 弐人曰天竺ニハ萩尊ヲ尚ヒリ有ヒテ天理ニ反スト邪淫ト仏経ニモ誡メタル由 唐土ニモ亦有ヒテ此頃童ノ文ヲ尚書ニ出タリトナリ 皇国モ昔ヨリアリシニテ特ニ戦国ノ時ハ陣中ニ婦女ヲ携フルコノ難キニヨリ盛ニ行レ昇平ノ今ハ往々争闘アリシニ諸本ニ有ヒ官令アリテ武江ニ来ル五月男色ヲ禁ズ此時何某鹿蔵ト云ル美少年ノ物詰ニヨリ男色ノコト此時ヨリ止ニ寛文ノ比ニ至リ又行レシガ事アリテ止ニクル由同書ヨリ昔ノ古言ニ男色ヲ若衆道ト云若道衆壹野道トモ若道ト云ハ若衆ノ道トヨリ野道トハ野郎ノ道トヲ去俗吉ヨリ如此当時迄ハ士民ノ美少年ニ狂セシ故ニ此時驗動アリシヨリ官禁アリシニ愚案ニ男比ヨリ男色盛ニ行レ遂ニ天保ニ至リテ男色衰ヒ官禁アリテ今ハ七ヶ敷ノ文化十二年雪本座塚談ニ男色楼芳町ヲ芳トレリ木挽町天神 堺町 葺屋町 芝神明前此七ヶ所ニ残リ三四年已前迄棒アリ代地 神田花房町 芝神明前ノ二残リ三四年已前迄棒アリ 通油町 湯島天神 糀町天神 堺町 葺屋町 芳町ニ百餘人モアリケル由 此内ヨリ芝居ヘ出テ歌舞スルヲ舞子ト云又色子ト書ニテ四五十人モアリ此者共ヨリ出来テ上手ト古ヒ女形ハ多クハ此者共ヨリ出ル由ニ古評判記ヲ看テ知ルベシ 既ニ当時ノ座上ニ於テ緑ハ舞臺ヨリ 盃ヲ給テ知ルベシ 盃ヲ給ハル処ニ女形ノ種ナリ江戸役者ノ女形ハ皆上手役者ノ女形ハ有ヤ無ヤニシテ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

芳町ニ十四五人湯島ニ十人斗モ有ルヨシ聞リ
宝暦比ヨリ遣ヒ減少セシヨシニテ今ニ於テハ
衰ヘ遂ニ官令ニテ廃絶セリ男色ノ
神明前八町堀ノ代地ト云ヒ又男伝師ノ
是ヲ洩セリ芳町ハ菊岡仇地ニ
家ニモ寄ヲ請ケ又同所ニカケニ茶屋
アリテハ男色ヲ俗言ニ蔭間ト云カケ
都氏ハ艶治郎上野ニテ治野日昔故ニ
又江戸ニテ神明ハ増上寺ニ近ノ湯島ノ東叡山ニ近ニ寄色ノ客ハ士
民モアレド僧僧ヲ専トスルシ又稚ニハ
勝婢モ客ニアル由シ 好色ヲ後家婦女又ハ甘家
又江戸ニカケ茶屋ハ出合トスルニテ男女寮會ノ所トス聊ヲ酒肴ヲ出シニテ
席料金一分シ
後考男色ニ都氏天保官令後廃絶セリ
密ニ再行スル由天保前ニ都氏女教ヲ
美少年ノ男教ナリト云

大坂ハ坂町ト云遊女町ノ中ニアリ
京師ハ鴨川東ノ宮川町ト云遊女町ノ中ニアリ



京坂ニ著衆座ト称シ帯ヲ
表指ニ懸リ蔓ヲ著ノ行燈ニ
又京坂ノ男色ハ比皆然ス
家号ヲ以テ中村某
太夫ト云シ
西鶴ノ男色産ト云本ニモ花山藤ニ助松風琴ニ亜
雪山松ニ助ト云男色ノ名ヲ設ケタリ是ハ師家ノ苗
ニ非ス有因ノ作リ名ナリ

江戸ニハ行燈等無シ

人倫訓蒙圖彙曰 **狂言役者** 男ヨヲ遊女屋ノ如ク抱ヘ置ニ小藝ヲ仕入ルシ十四五歳ニナレバ夫々ニ名遣リ芝居ヘ出シ藝能名ヲ取レハ我門口ニ大筆ニ誰ヤ殿ト名字ヲ誌シ夜ハ太口ニ提行燈ニ名ヲ書テ置シ乗輿ヘ出又ハ中ケ々ヽ去 他国ヲ巡ルヲ飛子トゝゝ 野郎ノ新部ヲニ賣リゝ 新部ヲハ古ヨリ上京坂ハ大筆ニ行燈ニ書ヽ出サヽ 蓋迚世看夜右衛ノ行燈ヲ出セリ

又迚世ハ中ケ々ハ印ノ男色ノ名トシ上京坂ニテハ中ケ々ノ名廃絶シニノ唯ワヤ〳〵トノミナレ共 昔ハ芝居ヘ出サル者ヲ蔭間トゝシ幾年ノ年前迚其名アリ 飛子 新部ヲ上京坂ニ遊女屋同断ニ若衆茶屋ニテ迎ヽシ 若衆茶屋ニハ印ノ振袖ヲ着シ髪ヲ島田其他ニ遊女ト同リ時々ノ流行ニ順フシ又 傾城ニ振袖ヲ着セ大小ヲ佩ニテ小姓ニ扮ス 茅ニ出ル二ハ異成ナリ神武ハ詩神ニ袴ヲ着ル時モアリ

又 天保庚申以来三都ニ七ニテ舞ヽ雛ニ印ノ上野 紀高野山等ノ僧坊ニハ小姓ヲ名乗ヽ浴帥ヲ今モ専ラ養ヽシ又山東ハ人心荒キ故ニ男色ニナリ難ク故ニ天保ノ上京坂ヨリ幼年ノ男子ヲ印ニ賣リ下スニシ昔ハ印ノ出生モアリシヤ塚ノ文覚束ナシ

因記 京師宮川町某ノ家ニテ通和散一名ヲリギトヽ白キ末葉ヲ製シ三都ニ賣ヽ男色ヲヲヽ用ヽ先ヲ浴シ肛門ニ塗ルハ即チ潤カニナルシ三都男色用ヽ又新妓始ヲ交ルノ時用ヽ蓋長年ニハ不用ヽ十三四ヽ者ニ用ヽテアルシ然ハ女ヲ又男色ハ五更前ヨリ大便肛門ニ下ル故ニ五更比ニハ交ラズ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

守貞ガ古ハ街治郎ヲ始メ士民ヒニ常ノ美少年ニ過ギテ士ヲ男色ノ下更ニ過ギテ士ヲ男色ノ始ト
古書ニ記シ金比宝永正徳ノ後ノ事ナリ
或ハ古ハ大若衆ト号ケテ二十四五才迄童姿ヲ改サル者多ク是ヲ
男色盛ント故ニ又美少年ノ使ヒ名アリシナラシ

稲光舎随筆云深川盛ノ時分ハ士橋ノ娼女便昼夜銀十二匁ヅヽ
ニテ呼ビシ栄喜横下ノ子供屋ヨリ呼出シ士ハ二ノ茶屋ニ遊ブ仲丁モ便
同ノ中裏ノ子供屋ヨリ呼出シ中丁ノ茶屋ニ遊ブ表ヤクラ裡矢倉
裏櫓ハウラニ子供屋在ヲ呼出スハウラヤクラ夜継ハ子供内ニ在リ何レモ
別ニ藝者アリ仲丁ノ西北ニ個庁場ト云ハ金二朱ニテ
松竜丁ニ大新地ニ大漢楼五明楼百歩楼ニ斬ノ揚屋アリ何レモ大
河ヨリ舟着ニテ二階見通シ仲町ト同ジノ如大新地
在テ呼出ス便仲町ニ同ジノ如大新地
ニテ抱ヘ置故ニ名ヲ何吉何次ナドヨブ其外ハ町取奉公人請状ニテ抱ル
由シ小新地ハ昼夜金弐歩二ツ六トナル娼家四五軒在テ内ニ子供アリ
新石場ノ古石場ハ裡櫓格子ナド、同ジ
迎トテ屋根舟ニ打乗テ舟宿迄遣ヒニ往テアリ又送リトテ客ト共ニ舟ニ
乗往クモアリ皆衣類及ビ頭ノ道具、美ヲ尽シ
高金ノ品ヲ用フル又ナルコトヲ仲町ニ
並ブニテ頭ノ道具高金ノ品ヲ用フル
文夜四百文シ娼女ノ衣類サラサ木綿ナドハヤク着ズ
裾廻シ黒木綿ヲ用ヒ何レモ醜ナル姿ニテ
見ニテトル此所ニ切見世モアリ大見世ニ准ヘテ考ヘシ又深川岡場所
屋四五軒在テハウラノ子供屋ヨリ呼出スハ
便ク櫓下スソヅキト同ジ藝者ニテリ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

辺引手茶屋多シ本所 御船蔵 前町ヲ里俗ニ米宅ト云 アリ爰ニキリミセ
在テ娼女モ衣類モ好シ又化粧坂ニナル天保中天
無ク此所軒並水茶屋シ此茶店ノ背ニ沸
内ニ子供アリテ便帯盤ヲ二同シ又一丁目新
愛ニ立ル行ノ娼家アリ至テ稽便ノ便ニシテ
ヲ禁ト雖ヲ呼ブ子供屋ハウラニ在テ
時ニ久便昼夜一両ヲ以トキリハ一分ニシ
ノ作リ方ニ非ズ手枕ヲ川流ノ調ヘシ此処ヲ
娼家アリ子供内ニ在テ便帯盤ト同シ此辺川手茶屋多シ
松井丁ヘ客ヲ送ルシ日ク入江町ニ鐘ノ下トテ
シ此辺ヨリ長崎町 長岡丁 吉岡丁ノ辺幾
ニ夜鷹屋トカアリテノ種ハ小女ノ姿ニ粧ヒ姥ハ黒
島田曲ニセメテ扇ノ帯名ハ幟 燈ノ流ヲ
メリテアリ何レモ 癆毒ヲ娼家ニ用ヒ雖キ
ヲ埋メ手拭ヲホウカムリニテ 垢有名木綿布ヲニ黄バミタル木綿ニ布ヲ
ニテ載物ヲ抱ヘテ端々ノ辻ニ立テ 睫月夜ヲ上旨尾トシテオイテクト
呼声マメマシテイト哀シ予幼少ノ比迄ハ 惜ヲ責ル廿四文 数ヲ所ヲシガ
今ハ其ヲ所ヲシ川柳点ニ曰ク白ニヌツタヨタノ
襟ニモ白粉ヲヌリ 顔ハ都ヲ於化粧シテ髪
乍天ヲ着テ古キ 縮緬ノ二布ニタルモ見ル
故 便モ五十銭百銭ニヨリケル由夜鷹ノ名
六手ノ比谷中ノ笠売稲荷ヲ諸人 癪封ノ平愈ヲ祈
顔ヲシテ流行シケル顔カケスル時土ノ団ヲヨ
奉ルヒシ因ヲ外門前ノ水茶屋四五軒在テ此供物ヲ以ル二
故土ノ処ヲト呼ヲル声ヲ其水茶屋ノ娘ヲ
門家内ノ美人ノ一人シ此娘ヲ見テヲ諸人参
放娘ノ流行ヲル故ヲ子雛ヲ愛ニ今ノ天王
昔ハ門前ニイロハ茶屋トテ四五軒ノ娼家アリニテ
引手茶屋 繁昌ヲ墨屋モアリ娼女ノ便五六
軒ヲ並ベ惣門ヨリ内ハ両側ヒ一面ニ娼家ヲ
焼ストハ雖ヒ追々普請美ヲ尽シ惣テ谷中ニ同シク又
又音羽丁八丁目ニ娼家アリ同ク切見
切見世アリ赤坂門外ニ濡地ノ端ニ蕎飯ト
町ニ二四軒アリ便五六ニノ至テ稽便ノ遊所
原深川ナドヲ米ニ見ヲ夫ヨリ賤キトヲ
リ麻布市兵衛町ノ東側背ハ谷シ愛ニ
切見世アリ天保八乙酉ノ年此有馬家ノ中間ト喧嘩有テ
切見世ニ所アリ此所ニ夜鷹屋モ在テ吉
トテ娼家五六軒アリ妻飯ニ同シ愛ニ切見世モアリ
右ノ文中浦所ニ便五六トアルハ四六ノ誤ナラン五六ノ便アリシ

未聞く
又夜鷹ノ事ヲ条記セントテ各皆不具ノ女ノミノ如シ片輪者モ無
ハ非ル尺丈ノ如リニハ非ズ
又土橋ハ文政中ニ亡名扶　天保庚寅ノ時ニハ無ク

日書ク天保十三年寅三月十日浅草壹前地
夏キ　尊盧ヨリ以下ハ戸中端々料里屋水茶
喫茶イクメシ外場所ヘ引払ヒ可申旨　仰渡
屋イクメシ外ハ勝手次第ノ旨且又是迄抱置ノ女共
モ勝手次第ノ旨御触アリ即仁恵ノ有カタキヲ知リ
又吉原町ヘ入ラ廓屋ニ居ルモアリ
壹前ハ元世ニ間壹前ノ上景ニシ娼家ヲ置
ト称シ大屋儒ト云者　召捕罪ニ処ス
料理屋八箱ニテ喫女屋ヒ者シ水茶屋ヒ
水茶屋ハ御外シ
又日天明比迄ハ切見世イヲ五十銭ト云　價五十
銘見世ト云ハ神明前カケ々茶屋ニテ街アリ又八丁堀杉平稲荷前
丁ニテ街カケ々アリ是ハ家造リ粗末ニテ小合茶屋ト
ニモ　夜町ニモ日ヲ在ク男色シ
江戸中吉原駅宿ヲ除キ右ニ次所二十七ケ所　野郎座四ケ所シ天保ニ
禁止トナル

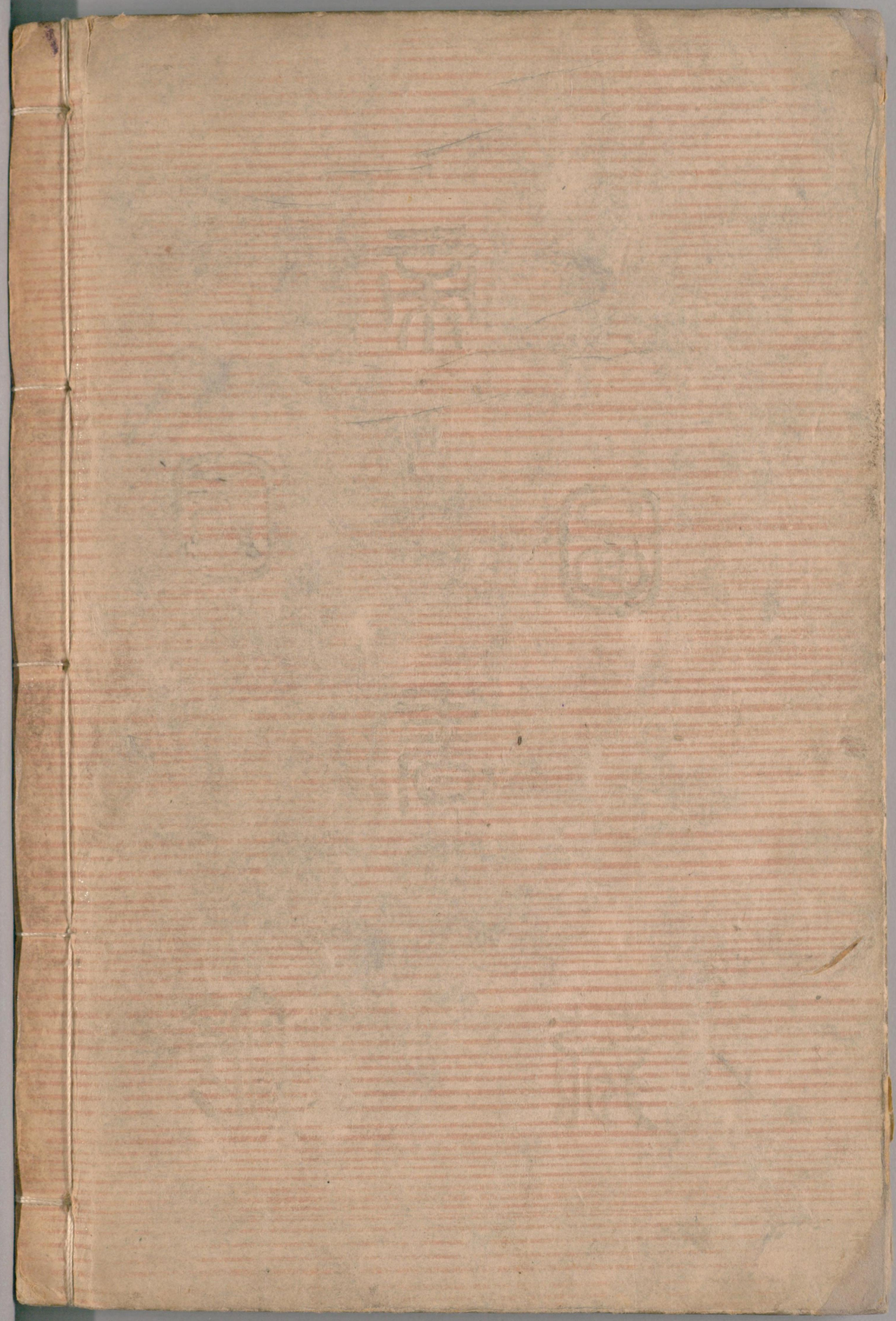
寝

上頭　ニツアゲト訓ズ　世事談曰娼女始テ水上ト云俗ニ
云商人ノ荷物ヲ船ヨリ下ン始テ店頭ヘ出ス
街リ初ルヲ初ト云リ番ニ水上ト云ニ准ジ妓女ノ色ヲ
ニテ算スルヲ日本ニテ女ヲ縁辺ニテ后髪ヲ
事シ夫彼取合テ云ルモノ称ス　守貞曰娼妓始テ
妓ニテハ水上ト云江戸ニテハ未聞ク　三都共ニ娼妓ノミニ非ズ衆女始テ男ニ交
ルヲ俗ニアラバイワルトシ未通ノ隠ヲノアラバイトシ諸物ノ新ヲサラトス
東嬬ヲ曰雛妓初而人ニ出ルヲ水上トス　水上トハ船ヨリ陸ヘ荷物ヲ
荷物ヲ船ヨリ陸ヘ初テ上ルヲ水上トス　准ジテ女ヲ書リ戸葉ニ未通女ヲト
ト書ア未タ人ニ不見ノ少婦ヲ云バ初テ揚ル雛妓故全ク未通揚ニ同ジ
中巻水上ノ意推シ知ベシ

10
15

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41

ガラス使用